源氏目案

中 よよろ
やまて

[v. 2]

PL 788
.4
.G43G326
1654
vol. 2
Copy 1
Asian
Japan
Cage

2004551303

源氏目案巻第三

目次中

よ

一 よれたあしにも 此門の此度ハ何度も京代まで 記とも故也

一 よりぶるく 河 無様 一 よせともく 諭者 餘情二説也

一 ようせずハ 不能 不善 あしくせずと云心也

一 よろしきことにぶに さまてもなきことにぶことも よろし

きといふ詞 寔ハ大かたなるに云ふ よきことにいふ事もあり 一家 一家也

一 よもぎふ 蓬のしけるを生たれなと云也

一 よこさ海なるやうにて 横死とて人のそれこなどにて死とる

と云也

一 よれおとゞ 夜数也 清涼数

まわり四方妻戸 南ハ大妻戸一間なり

一世人 よれ人ごの文字を加へてよむべし 後宇多院の御諱
世仁とかしせい思あるなや
更衣に似ぬへるとれ心や 又教つぶと深と似たるとや 毎説
一よそひ よそ得ひや
もいへり
是いさうべき女の心をさてのまうべきやうれ毎とへをいへるや
一よさぬ 不過や
触といふ心
あさぬ人のやうにとや
あひたなれバとや
一よみがへり 蘇生 又活
一よりかへ 繼母 繼子の
一よりかひ ゆがこたるさ海や
一よりてこそ 女のそれりとぞ見

御とりかゝるこゝへて、よりてこそと云也、ちかづきしさとれるや

一よそひの御どもまけるく 源氏十六才 此息所 女三才

一よづめ 打(うち)ぬ心也

一よべきのふの夜のしるや、よんへ

とかたわてよむや

一よれつれなきは物語 出家(シツケ)なれば、無量(ムシヤウ)を先出(ツハナシ)あつや

一よげいたる 世なれたる心也

一世(哥)かたりは さめぬ夏(ゆめ)とは、ぬる時(とき)

の夏は、あしぎ、ちるなき世にいふべし

一(哥)よる波の 玉もれゆしるしやうに、源の心にせてよめる

一(哥)よそへ(みちのち)いし なぞしこれ、ワ家によそへつゝや

一(哥)世(ぎのしん)は志しぬ 世に世(キヤ)分別(フンベツ)也

一世(おのひ)の中かたりする 桐壺帝(キリツボノミカト)は位(クラヰ)

と、朱雀(シユシヤク)へゆづりあつるや

一世のたがと 世のるしひや、恐(サガ)

の字と万葉に用

一よ何の僧都　中宮のれおぢや。

恵心僧都号横川僧都

一よりぬことどもいでくめれば

源氏左遷の夏ぬべし。恵右などの八宮のまをまほしまふ

夏也。宇治の巻にえしたり

一よる波に　此酒にて用意し

たる衣なれば志ほたるしも也

一よしきうもおなじすけにて

弄　濡門佐なるべし。同ごハ前のゆげいの義人の事也。廷尉佐

別当の下也。さてをふなり

一よりひかりかん玉の　史記曰

尚有徑寸之殊。照車前後各十二葉。楚王臣隋侯蛇病愈

ましに七寸の玉と含て夜来て。恩を報じたり。隋侯此玉

と得て。楚王に献じ。夜中に常に有光明。故名夜光王

一世間ありし治ぶき　明石入道。瑞夢とぞ事いへり

一 ありしぬもれく 桂葉子にすき夜じ記すに老女のけしやうせ

一 よしかされおとゞ 弄良房のおとゞの例にて お紙馬を引

る 後代にまち例もちゐる事 河海要 紙良房公乃時の

事は不見たしかならず もやましかにてをくべし

一 四まち紙しめて うれ月の物語に紀伊国ひろの郡に神

なひのこれ松といふ出者 喫上の演のもとに四面八町の内に紫

檀蘇芳くろかひ かしもちなど云ますを枝末として金銀瑠

璃 車渠馬瑙の如何度を作りかさねて東陣のさしは春山南乃

陣のとは夜のかけ 西の陣のとは秋の林 北には松の林四面を

絶くりうへるとゝ云ふ此度を模する也

一 世のことひの後のとそれと 後の父を父とをもとゝ云ふあるも

一みやびやく弄のどかなる心也　一まろうひなども玉くら従三
位し給ふ　一まてちよおちかへれバ法賀
執政人四十ノ賀例古堀河のおほいまうちぎみ四十ノ賀九条の家
にて業平桜花の哥を詠　一またつれの朱雀院の紅葉賀
せられしは何也されつるはなりずさく院とおぼしさる給也
一世をのがれ世をはなれしはうき世のなさけのなき也ぞあるべし
所とハ野老をうちかけたるや也おなじ蓮の所をもとめへとの心也
一ゆめかゝりすこく夢を信ずるハ小児女子などのこのむことと云々
又孫真人云夜夢不須説心よや
一よるの帳のうへしとよせてあかしあけて　女三の宮まいんなを
帳台の事也悪鬼をおそれのまへハ三ツ人ずらくはるべく送るとぞ

つゝ夜の用ゑはすくしのうちびらを四方にうつるやそれとこれおがるや

一 奇幻 ようとしう 菓蔭水暗螢知

夜 朗 風 雲は東としう深はさゝに無分別こそ深のさはひるとも不消こそや

一 奇行川 よそにては 槁木 葉枝なくしてもぎあげうるまや

一 奇さし水 世代いとふ 八重うつ雲とへだてゝ八宮の世をいとひ給ふとの給や

冷泉は此心はうらへども えそひきゝ給ふぬこれ心や

一 あけまの紀 よもれ山の嶺と 雪と云也 夜雨に此詞あり

一 ほうらひ 世にうらしなれ 大君と慧これ中の契無実ゆるをいへり

一 やさうま よれのつゝ拘 賭俗にかけをすうといふや 賭弓もかけ拘也

一 奇 よそへてそ 朝がれと大君に比して大君によそへて中の君と

こんこれ心也

一 よ紀うこ中に 方士 又旁

求四虚上下。東極ハ天海ニ跨蓬壺ニ見窕高仙山多樓閣西ノ
廂下。有洞戸東嚮ニ閾其門。署曰玉妃太真院 長恨哥傳

一 よもぎのまろれ よもぎのまろれ さけさ有ま一宿さらう心成べし

た

一 玉のおのこゆ子 玉ハ和めてる詞也 玉の緒といひかけたる

一 たゆげ たるき心也

一 たくへがたれ 雛堪

一 たくへ 遠ちくへと同

一 たくれゆく まかろしハ方士也 幻術士ガ名也 玉のあかりとれ。
更衣の魂のまて所といへる

一 大海の芙蓉未央柳 見長恨哥ニ
大海ハ池の名也 芙蓉ハ蓮の花也 未央ハ宮の名也 蓮花柳ハ楊貴妃
となぞへたる

一 大床子のおもれ 禁中ハ大床子所

ぞうさ机を二そくとれ胎をゆうや。是ハ常にまいる供御れや。おされハ後世をゆうや

一たいくもつさ　退散

一たくよハさし　不漂

一たく人ゑぶふどうもしや　摂政関白とも帝の御上ふるまゑ出久

人どの後や親主の分限よりハ曳さり後らや

一たくぬべさ　後やよへめりハ淫や

一たつざ　便

一太ゐうして　此脇人の家どうじろんべくたるめふへふり

一立田姫こいろんうを　女の物もぶじよまま染あしくるまあち。

一七夕のゐまも　くるめつる

まへていうや

一たのゐろ　祝や

もよゐまちれとや

一たもうれ　方便

一たらしへむくうへすくや

一しハ助語や

一たどく人　分別する人へむくゞや

一たゝうがこ 鼻紙(ヌヤ)や

一たゝかれ 誰(ヘ)ぞとうたがふほどにくらさ夕(ゆゑ)を云也

一たゆます ゝもまぬやゝもむハ由(ユ)所(ダ)や

一渋口 あつかの子ゝ 禁中にて渋口(タヂグチ)の宿所(トノイ)中女人武家(ブケ)
よりとゝるゝや院にてハ武者(ブシヤ)所(ドコロ)といふや源(ゲン)の番の者を渋口とん
得あふや

一大とこ 大徳(ダイトク)や 起る法(ヌウ)しを

一たむけ 手向(タムケ) 糀(タヒ)ゝ人に勝(ヲク)る

一大臣の後にて 明石ノ入道大臣の

一代々の国の門ゝ 播磨(ハリマノ)国司(コクシ)

云也

物なり

孫(ミゴ)や 系品(ケイヅ)にこも

といふ国司ハ一任(ミン)四ケ年とて国司にありてハ必ずめに必ず
ゝるや その受領(ジユリヤウ)ごとに縁(エン)にいひあはせんといへだうけひかぎるや

一大納言のむすめ　紫の母也　一たちとまり　色うくはなど立
とまり給ふぬぞ。菓の戸ざしなれば。さりなべきにもあらぬと云也
一たいよ　東の射也　一たりやまれ　まやすさと云詞
よいの字をそへたり　一大鼓をさへかうらんのもとに。
地下の示人庭上にての役也　花　礼記曰。鐘鼓在庭。琴瑟在
堂　今菓大鼓は必堂下にて打るや。但寛治四年五月廿五
日。殿上競馬六番の時。主上自打大鼓給。此時置堂上也
一大そん所　禁中にて。女房遊のある所也
一たそやき　婀娜　桂仙家　一たんぬん給ふ　花鳥云
先第上儒者奉作獻題次書韵字盛中垸置庭中文
墨上近衛次将先探御料韵二字置莒盖昇自御前

階獻之次王卿堪属文者文人未各進文臺頭探一字
見之奏官性名及所探字也今案探韵ハ各一字詩也
悉韵字かりつ也故懐紙端作云春日同賦春夜翫桜花
各分一字應製詩探得其字ヲめし書へきや
一大将の志　大将ハ系譜よりも愈相まで兼ずる儀也源氏ハ此時
参議大将也宰相兼大将例藤原房前冬嗣公常行一条摂政
一大将の志もいかうまつる給参議二人の内一人まであるかと也花略之
一大将の志もうをまて後　奏上のゆゑ給ひしハ此息所を源の
が妻なるを世上よりも又世の家のうちまも忘れたとも
一たけかしれハ強ちなれハとも　一たきこうほと探彩及菓
蔬随時恭敬與提婆達多不
一たうどるを後りや

一たゞこれましまゆく 弄 天廻雲鑒雲將霽唯是西行月
不遷 菅
一たけあめり垣 五架三間新草
堂石階松柱竹編墻 白氏文集
一たゞのぐちど 彈碁
後漢書梁冀能彈碁 和國にてハこれぬ物也 河委
一たれかるさ ちぐさなれ心也 霧にそへたる
一たまもちど 海邊にたりける 玉裳ハ後撰に見ゆ 女の裳
束をかづけたり 裳ハ女のさぬにそふ物也
一たうぶいのれ子ハ 太太尼のれ女 鬚黒のいまうと也 薬香殿
女れとれ服に生れ給ふ也 一太上天皇に 弄 夜つぐ尼に成
給しかば 皇太后などに奴給べきなしれば也 河海本朝太上天皇ハ
持統より始る 女帝也 薄雲の女院の弟号ハ持統の例たる

花鳥
女院着(モミ)ハ位につき給ハで院に成のみ。一条院などをバ太
上天皇の尊号(ソンガウ)とハ申侍らず。但封戸(ホウコ)年官(子ンクワン)年爵(子ンシヤク)なども差(サシ)
異(カハリ)もなけれバなずらふるとハ申侍る也。封とハ封戸(ホウコ)なり。三(ミツ)又も
各(オノ〳〵)千戸百戸(コ)あるを太上天皇になずらへて、二千戸(コ)給りしなりとや。
院号(ゴウ)ハ女院がみなすれバさなく判官(ハン)代(ダイ)・主典(シユテン)代(ダイ)などや　三宮ハ太(タイ)
皇太后(タイコウグウ)・皇太后・皇后。
一たゞの鴻に　明石上(アカシノウヘ)経(ツギ)すなり　一たびしらつ　類聚(ルイジユ)・山なる
ひしらつまでもしらと。民(タヒラ)河原(カハラ)などやことひと同音せるを
ひとふなどし。河原ハ纖(ロ)女(タチリ)　一玉くづる　やがて落ゆくとや。
ちうんハ誓言(セイゴン)。道祖(ダウソ)神(ジン)も地説あれども心ひくなどそめぬと奴べし
一塔こぼちたるも　昔女貞女(ムカシキヌナニテイジヨ)ちうしなふるてあれバ人

のうたがひもまとて塔の壁をこぼちて焼あしくなるとなり。
丁こぼちたりともあるし河顔牧子がすと云々花かつらの中納言
抽説にまた丁こぼつや弄畢竟しぼうまる女のすぬべし
一竹とり抽説や梅壺方也
一瀬殿大宮寺にをとらぬと
や貞観十八年二月廿五日以滝瀬院為大宮寺棲霞寺にも
瀬殿あり
一しすきこ川ゆひ襷サイ人の姿
を云一説にハ玉手袍とて玉をかざりてかつるや女ハかけ帯と云々
一大がくのうち西三条大臣良相公ハ閑院左大臣家冬嗣公
のまや大臣の息大学のみを習ひ木の例也
一大将内大臣にならぬひて内大臣執政例堀河関白忠義公兼通天
禄三十月廿七日内覧同十一月廿七日略く例あまたこれ

一辰の日の舞つくれ候ハ十一月丑日より始若丑二ツ日ハ
下の丑也。但上の丑にも有例也。丑日ハ舞妓乗入。寅日ハ
節の心ニ。卯ノ日ハ童女出覧。辰ノ日ハ又節の終の節會の日也。
辰の日の舞つくとあるは不審也。豊明節會ハ同中乃辰
日也。若ハ又節のわハ打まきれて。豊明まてゝ也さるゝ也

一たうぢりのつきうふり　出給年宮年爵也

一大学の忌その日　進士注曰。可進受爵祿者也　聖武天皇
神龜年。始進士試。帝王系圖進士及第例　以下詞略之　弄一勘
秀才ならかハいづれも進士と云也。必しもの中よりのかう
れ云付給ふ也　一大まのぐん河　大宰府一員ニ
帥權大弐小弐。大監人小監人。大典大小令史等あり。小弐叙爵之

時、小卿と云、監叙爵の時、大史監と号す、大監ハ正六位下、小監
従六位、大監ハ正六位下相当官なれど、従五位下に叙しぬ
れも、大史の監と稱せらるなり

一大ひさ　大悲者　観音のことや

一たゆさ　堕疏史記をちづれをこうかしき、是深笑也

一たゆしまも引出ひべきねに　長根にむすび付くるとハ根に音
をなくことになずらへて、こゝぬ泪のほどをきこゝろや

一たきうらくそん　六日、武徳殿騎射をして、打毬の事ハ、
唐人の狼来にて馬に乗て、毬子ハ毬をじむるを、打毬と云、其時
養する手ハ、打毬手とハ云也、納蘋利も、六日の競馬の日、雅楽
寮是を養せ、晴負の乱声ハ必競馬にあるなり也

たつかくるゝ くゞのこゝろれも同しすや倒(タウ)や(タフル)おれたる心也

一たてしとゝ やるもぞや　一たつぬるに　今ハそうかあり

ゆうに此給ふすやかぐとハかゝ何也

一たしぬことひ　迷(レン)投(シ)てあるに何として隔心(キカクシン)あるぞとや

一たんのうしくゝ　悩(ダン)くゝ組(クミ)たるひもなり

一たとやめの　嫋女(タヲヤメ)　雲内もうる人がしに父のまきしんとや

一太上天皇にあすしふ　漢(カン)高祖(カウソ)の父太公(チヽタイコウ)を太上天皇にあし

給ふすをおもへるれ　日本にも例しかるしず

一たいしき　平ノ字や　多いしかともあ

一たいきやうにあすしへて　中宮の大饗(きやう)にて年(しく)にあるも

ごとく此度(こび)の御賀(ガ)にさせ給とのすや　花鳥　正月二日二ノ夜

大饗ノ事。西宮記云。大納言白大掛二紙。中納言同名一紙。參
議大掛一紙。非參議四位柳色小掛。又位細長一連云云略之
一たしろうね 絵眼深也 一たぐらして 瞯 又 爛
一たけたちひとしき せいたけも同様なり。一説人也
一これり又 心は縁よしの松の神代をへたりるを源氏をとひ
給ぶ。ち心紙をかて。又も問べき人はなきとや
一たりもしのあそん ひもろぎの哥を。清慎袋草子平文時也
あり。たぐたりもしの哥のかなてをとべし
一大ぐく 大曲也 一立てひて 心は我もさひとぐ
海さ雨なれば。稲本の清給ぐ。ち燻る。女三も立てひてきしんとや。
それを燻ちんべといふ給也 一たりうか 筍也

一たきぐうさんぐん　提婆尼採薪及菓蔬隨時恭敬与薪
さまと紙荷て蔬人の役にて五参日蔬明にひきて引道あ
一哥たきぐうさん　採菓汲水拾薪設食　正時奉事經於子歳
子歳給ふすの如昔此身ながら久しく親とや今ふ紙をじめにて
を後の親を云也
一哥たしぬべき　たしぬべき身とう
けたり上は佛へ職なれば常在灵鷲山の心もあり親我生ら
見諸仏世ゝ恒罪源妙典花ちる里とは別てへだてなりしや
一むしぬの　源の魂このうちにとまらんとや
一哥竹川の　竹河の曲をうたひしるをいしと云也竹川のうたひ
もあり何事にゆるせめざしくりへてとあるゆへよあり
一哥竹河は　侍従也しもやく後ひしをとがめなりしいるなり

目中土

まゝ又どゞまつり給ふんと早下(ひげ)まや

一たちふしん　薫(カホル)出家あらば家をこれまんと思ひしこや

一たゝつ　糸紙くり基(ダイ)、紵(ジン)紙令(ギリヤウ)水(スイ)楠(ヨウ)絹(ギン)線(セン)桂(チウ)と云ふ

一猿のやどり　晨鶏(シンケイ)并鳴(ヒニナイテ)殘月(ホウシ)没(セイ)征馬(ハ)連嘶(シキリニイハフテ)行人出(ツ)　白氏文集

一たうのもい　昔ハ清(シヨ)らまて拜賀(ハイガ)ある今ハ禁中まで也答拜(トウハイ)ハ亭(テイ)主(シユ)も南階(カイ)まくだりて返礼(ヨイ)ある心也揖讓(イウジヨウ)の作法也彰大納言の拜賀ハ薫ハ束帯(ソクタイ)白(ナラシ)の直衣下がさねめづらしきれ

一大夫(うきみ)がりやれ　大夫がもとへと云詞也がりハ許(ガリ)也

一大内記　或(シキフノ)ハ捕(セウ)無(ハ)ふ

一たけふのうふ　いつくまましま

すとも参(いつ)べきと云詞也

一たいしやくもくしあふ　梵(ボン)天

帝釈(タイシヤク)ハ人身をのうきとり天也帝尺(タイシヤク)ハ忉利(タウリ)天の主(アルジ)

一 櫻(哥タチヤ)の 櫻のまほふあるかは心してなくべきなるとなりむしと思ふ
洞にいひなしのみや

一 脱(哥タビ)ねして 振ねしてこころこ
なへ此心のうつかうつらぬはさて後に 変定(ケツヂヤウ)あれとなり

一 たけふちちかく 笛のしやうが紙 和琴(ワゴン)にうけして引ふる

一 玉にきす 玷(テン)キス 毛詩

一 たちそてく 親などの中なとを
影(ダンゼツ)ぜつ 絶しろ抱をとし給也

一 たまとれ 殯(タマトノ)夜 見葬(サウレイ)礼(キシキ)記式
殯(モガリヤニフクハン)へ 棺(モガリヤニフクハン)しろ人を垂(オク)所也 殯夜にて 穎生(ソセイ)しろ事なりや
宇治のみこ 難波(ナニハ)のみこにあひなりて 抱をのなひしるね叶(アヒカナフ)
べきれ

一 たまの行えより 谷にあり家
の影ぞよりもや

れ

れ

一れうとて　源氏のめしれうとや

一れいのとうなき　どうてんなき心やれいも例や

一れいまさがくる月日かしのひら　令曰陰陽寮頭一人

掌天文暦数風雲氣色謂天文者日月五星廿八宿也

暦数者計日月之度数而造暦授時也氣色者風

雲之氣也言以五雲之色視其吉凶候十二風氣知

其妖祥　應和二年七月廿日黒雲氣廣三尺許起坤

亘艮　康和二年正月五日白雲廣三尺許經天亘東

西

一れうしうをさきんとて

寮試　花鳥試は史記をよましむるや　よくよみたる人を

擬文章生補とて次の詩は大学寮にて心ともる及第の人を

文章得業生に補す是を進士とも云ふ或は此前にて勅訊をなされて試らるゝものゝ文章生に補してのちさしに方略の宣旨を蒙て課試をとゞかるものゝ云々略

一れんし　練や　ねんごろの心

一れいのさんでん　こゝろ物あるものゝ所なれば例といへり

一れいのさうしゝ　こゞあげまゝの額をいへり

一れうわう　陵王楽や

一れいをさせ給　毎月八日中堂

まてや

う

一うねこ給　猜

一うゞのし　そゝなはなや

一うこしの人　おほき心や　こゝらとおなじ又そこもとれるをも云

一うぐくし　悪形や

一うひぶし　粧紙窓　横陳

元服の衣も。そひかづく女系する

一 そこはそ 足下花人をうしづく句也

一 そを 櫛也

一 それもれぐやいづれを中の字にて三の字をもけんされ心也

一 そひかし 添師也

一 そむられ 宵也

一 そはつさ 側付也。そこの始ずるまて。縦あるを横にてあるじ立てるるすを云也

一 それさだめたる。是くら馬

絃が音あらしこと紙云也。因縁と云也

一 そこはり そこにこともあるき心也。さりとはそこへくる句也

一 そうさあけて そくは。そくめさあけて也

うぶろうるか かぶさけるうき心也

日中十三

一そほかれがたかれたるや　一そむきぬるや　尼になりたる
を云也世代そむくに同し　一そだめ　くたけしめるら
一その人とは　これともしらぬ人とたるを
一そとづらの声　鴈(カリ)は八月十五日初(ハシメ)て渡(ワタル)や
一そよそれよるゞ云詞也　一そや　初(シヨ)雪(ヤ)也
一そうづきん　琴(キン)(コト)や　源氏は上(ジヤウズト)也
一そぐや　さうどいふ詞也　源の出と云也
一袖くそ　さむき朝(アシタ)手代ぬさ出さぬ也手をあらはむる也
一そくきぬ　とりさぶらきなどすかるや
一袖(哥)ぬるし　ここ夜を袖とぬしす家のゆかとしに行うとまし
きとれ心也　一そくろもしきまでなん

源の心のそゝろ立(ダツ)され心也
者の進者(タツシヤ)のるも也
飜(ヒルガヘ)もや。舞ハいづきともなし
そゝるゝ心也。胡(テウ)まもつくぬものゝ中に上るまぐ紙弱出ぬへ
なとも 紆(ソシウ)かぶむ心也
寺 踊哥(ヒウカ)の時の出しぎぬなどれごとく。ことさらめきたるなと。
よろしかしずとも給也。袖ぐちとハすぐれの下よりも。女房の
きぬの袖を出すこと也。今の世にも大饗(キヤウ)などれ。脇(ハシ)の綾(ギ)
式(シキ)のこと紀も。いぐしぎぬあるも
一 うてぬるゝ 花 恋ぢとハ沼(ドロ)とひらといつまつきたる詞也。さて
袖ぬるゝこともいへり。田子もいやもさへなり。さるへなどこもて。

一 うのゑのハ 鈍(シ)を修(ツク)べき。儒(ジユ)
一 袖ゑへて取紙 舞(ヒ)の袖(ソテ)を
一 うしうなる袖のし なる

沼中にはりたつ物ゝ此息所の紙方をなしと人語也

一 袖の上の玉のくだけたるもなん　朱勘

一 それをしたるかしれかと　ふかげくしたるも　それをれかとれしかとも

しこさくをよびたる也

一 次ナ　うちれせうそこ　大紙を帥

と云也

一 あし　うしはすゝ紙すりたるやうなて

ふしやこゝ也　帰来倚杖自歎息　俄頃風定雲墨色　杜詩

柱嶺瘴来雲似墨　洞庭春尽水如天　柳子厚詩

一 うひえてほそやかなるすがたゝ　俗にそびくどしたると云祈

一 よもさふ　うこそいそれこそいや

一 松風　うびやき　源の明石にていれせ

いもほそやぎ法ながいまはもれくしこさも

一 うれ人なしぬ　寛平遺誡云　今須云つゝ中令貢二人詮

非其子必令求貧しなどもいはれども、又節にまいりし
とあり上下略之
一 ひ忍の鷲がい 清濤六衛のも
けいかをいかべし 襲家 河北に委 令曰主鷲司正一人掌調習鷲
犬ヲ鷲ハ仁徳天皇ノ御宇ニ高麗よりはたり、初ハ倶知と
云しとや
一 ひうまれはいまし先れ
義和なり 仁明天皇 侍従 夜分なり 此秘蔵の事不傳男子と云制也
侍従 黒方 二方
一 ひれかれ 前の詞に前ハいと
いうしてとあり、然而大宮のまゝ雲井原のおとなしき人に成給
ふ心とあり
一 ひむじや 当者大饗の時当
者と云ふ事、ふぐ別てと心得て一筋、唐朝、法爵歯の三の内一
あるをば当者といへり
一 ぞくれかるのかこ 外典を云也

一 うれしさむさぬるさ　樂書曰、師文之變易寒暑、孫登之感動風雷、立ゝ謂琴度也、琴書云、師曠晉之樂官也、工於琴能易寒暑、占風雨、爲晉平公、鼓之感玄鶴下群

一 そこどころどもなく　そこのところどもなきなり

一 うほづる　雨の濕ふるや

一 うれもいとちるさ　弄太調云、正三位、經陸奥出羽、按察使兼行右近衛大將、菅原朝臣保忠、兼平六年七月十四日薨、四十七、号八條大將、時平公一男、本朝鳳雀の元始、保忠は物語に時代ちしそれをばさてをさて、もてをちくとるれすがをとる、世中にとりつきて此人をおしむとゝ云

一 うらをあゆむこゝ代して　業花物語云、院の女御の御葬送の夜、御車のしりに、院あゆみつゞ

かせあへり人ましまけしれて源氏もはれ引歩え

一それは　八宮の夏始て書出ね幼かのは時よりをあらはせり

一ぞくひさり　東坡山谷などもこづくる髪の僧在家の僧

ると詩にも作れり

一そてかれし　中恵を大恵に

比して歌見とよくあへり根ごめとは根ともにとも家へは出あらば

根なぞらう川ふ頭とも

一それこちは人にし　好色乃尊

者なれば蕙のうつりがをすいしあへり

一そよそれ　畫士をかれりじなれども忘がたさにのことも

一そくらう　賄賂財物紙送るや　山河は礼物を出して

官位にの得る心にや

一それやまとことも　言はるや

一そりうれたいのうへ　斑女園中秋扇笑　楚王臺上夜琴声

班女ハ後にすてられたる古支を待ほハ不知して下官を待ける
にや。待ほハ心をとられたるにや。白扇とあり首尾まてぬれしなとや
一 うくひす鳥の 可怜病雀半殺鷲人。落帽秋鶏三更唱暁
雅仙客

一 袖ふれし 昔の人ハこしぬに。
まほひハあるやうなること。白れとほとほさへ
一 うこひ雇もむしぬや
いづれも同心や
一 うつろ 坐すずろそぞろし。
一 うつ 猿や 王うつし史監そ
一 うちて なして文殺をそや
うひろくハ雉や
一心依為也。慈殺共殺と待にも待ち大梳殺の字あるへし
一 うしよるも哲やうなるなり 天運の
一 うハ心ある それハこころあるや

一うひくしきこゝ化　人の姿のちいさやかなるを云

つ

一つゆけき　露しげきや

一つれなき　雅四

一つと　集　日本記

一つゝ　龍　ほどれへたる心もある

一つゝかけるうゝかけると同心やつゝき同

一つがきんざい　清涼殿の東の山庭・月西の山庭に草花だ之種也

一つれぐ　徒然也

一つとへ　あつまる心也・ほどふとを

一つるかぬ事　後年若不繋舟ノ文選

一つぎく　次第くの心也

一つゝづえ　支顔　ようづえや

一つさくらね　官位也

一つゑくいるれど　恥　たる心也

一つるびきて　女は馬以がきてくらばさきそとけるびなりしを

れ女をころさんとせしてがぜくのけひきそてぢかけぬ儀(ぎ)や
一 つゞきからふ つゞきもうらやうらみては笛をふきくすゝや
一 つれなき紙 とかあへぬまで馬をひきへてかへるやつれなき
とうしきもちてぬきはごしひの丁字(ちやうじ)なき油に中将こそせ
んとてぢぐるめぐるや　一 つゐきう 舞風情(フゼイ)
一 つきしろひ 実(ツノ)や　一 つとめて 早朝(サウテウ)のるや
一 つゞら坊か 丸折(ジクラヲリ) 枕草子にさらてちるをなぶれつゞらがか
一 つさくしう 方段 様也　一 つまごろもさて 畏(ツヽミ) 続
衣(コロモ)箔(ハコ) 蒔絵 引見延(タリ)式　一 つまもよれ 心のやどいへ子をさそふ
心を下にふくめり　一 つかさきやく 市女(イチメ)笠(ガサ)にさ
きぬをそて中ゆひるかとりくわ

一つさめし　秋除目也・号京官除目・春除目者・号縣召・
各称仁之書召之・春者太政官廳・秋者於外記廳召
之・仍称官召・教隆手　八月也・是ハあづまし・秋ハつさめし
さいひつるや　一月のさむ　雲たちてえ禁
中れすよいあらず・中家れ出家しのて・助利天上ちどされ居也・此
世れやとは・在家のよや　一つゆきりいさあ　時さし寅・
なあへ出よるろ哥あどいら紀いすてあるべし　後まで書
さしまふそうろあるきて・哭之いひしそとなる
一つふりさ出のさ　缺家よあれば紅理ことと紀るすや
一つくりゑ　秋色さるや・まづきりうゑあどとさもりうきむやとゑ
一月のなのさあちもしれ給　月顔似鏡無朗罪　風気如刀ノ正

伐愁 荒敵

一月日れひかりをもて 若葉

巻に明石入る夏にしるすあり

一つるしまくさ 顔まくさや中略付也俗につまくしとの心

一つかしじかき等 ぢくれしじかき等也 職るすなどは硯紙情分

きり 旅店等也

一つやしまにかいも紀 貪家婦

掃地と東坡詩にもあり

一ついえられと をとろ人たり 神

なり 頻賞

一つまねの山を吹こす風も

甲斐なりしば根こし山こし風にこしてんたりも 常陸な

れば うきたりといへり

一つ〇のりこちりを 常則は蓋

工道風は能書也

一つまじ家しのうらず 不審の

所に 汎ぶりしを付也 よくよみ給ゆへのうらずとも

一つゐちまも大殿のれありきしなければ弄 源ノ太政大臣より
て節（セチ）食（エ）などの出仕（シ）すべきことにもあらざる故也
一つなりぬ無まのりゐる 放鴻（ハウタウ）の筆には侍などに人に商量（シヤウリヤウ）すると
ともりなるもぬ也さていとすべなげ也といへり 河 放鴻ノ試度（コヽロミノコト）也
一つり殿（こゝふ）（この）真（チン）などや
一つやも夜も弄 つやは夜れかにもこや
一つまこゝ急のやうにて 花 夜とへば我いひて紀ことに我人をやとひ
て時ぐそれもし紙云を つまごし急と云也 弄 本人の中 治度（ニヒ）に
言をこへていもんとや
一つしやうに をもくしき心也
一つきとも 笠（ツキ）とも也
一月日かさくり 女の方への文なが
がら 命（メイ）日をしるべしとや
一つぐいもちぬ 桂（ツギ）の葉に入るう
餅（モチ）也こゝ
一つゝ紙（ワれト）なるれて 花 和琴（ワゴン）也大皷（メイコ）

あどはうるぬを。つゞみ紙をあれてとゆへり

一つゝやくもしぶつや　一つゝも所　造物所（ツクモドコロ）　汁裏紙洞（タイリセンヒソ）ニ

一つゐきり　ふりきりや　一つねりす　不要初番（ツキニフサルナリハツ子）にさしが

らずと云がごとし　一つまりしき　弾指（ツマハシキ）云ふ

一つゝ所なし　秩仕（チジ）大臣　恙産（キタザ）をん所なしとや

一霧（哥ふろふえ）しげき薄（むぐら）の　此息（ミヤス）所の心は　虫（ムシ）の声（コエ）に　蛍（フエ）の音（ヲト）をとらんを

いへり。夕ぎりの蛍（フエ）の音（子）が　掐（カレハギ）まにかりぬと云心也。花虫の声なり

ふえの音を比（ヒ）すり。八雲（ヤクモ）此抄（セウ）にもひかれ給ひ。文選　長笛賦云

蜂（ハチ如ニアツマリアリク如ニアツマル）　聚蟻同　亢音猥積（ワイセキ）云ふ　一つゞみなどしぬへば　喨吐（ツダミ）小兒（ニ）

の乳（イ）とあまするや　一月（哥すゝむし）ゝげはおなじ　禁中も冷泉院（レイゼン）

の月もおなじ乳（ナヂ）なれば。深の花の秋ばかりかりしろと早下（ヒゲ）然べ

一つるだこ　黒多によれり志の流涼あり也。豫忌の時の衣也

一つれくと　虫の声は蟬也。かごとは人のなくまかうつけりして也

一ついたちのことつねよりも　六条院拝礼のすれ

一つくりあり　つくが恙也　虫の名也　含心臓と云ふ

一つかれうへなも　史記曰。季札之物使。小過徐君。徐君好季札劔口弗敢言。季札心知之。為使上国。束獻還至徐。徐君已死於是乃解其寶劔繫之徐君冢樹而去。従者曰。徐君已死。尚誰予乎。季札曰。不然。始我心已許之。豈以死倍吾心乎。呉世家

一つてまこし　毎よりすくさぬ

と大忌の哥ましなり也

一つかを　礼拝也

一つまなり　端也

一月ふりはいむ　後撰第十六月を

うけうしと衣といふはいひやとや人のまゝそれは引所引ニ云

一つきれ人まろく給　薫大将なれば（カホル）そのつきれ人とも中将少将

などゝ太大将まつく人をよびて祿（ロク）あるや

一つくも山を　浮舟（ウキフネ）はひたちの前司（ゼンジ）のまゝ子なれば（ゼンジ）つくも山と

いへり

一ついたち（うきふ舟）の夕月夜　荻の

うしは四月一日比とうきて　やがて其所の詞に七日の夕月夜と

あり　阿仏記（アブツキ）にも七日の月を一日比（コロ）の夕月夜（ユフツクヨ）といへり

一月（まるしひ）ことの八日　茶師（ヤクシ）の縁日（エンニチ）也

ね

一女（きりつか）れ　二位三位にいふ　后（キサキ）のつぎ也　嵩（ツ子）れ上臈（ラウ）の内方などゝ云位（多井）也

一ねちけ（もしまゝ）　侫人（ヨこしまゝ）（ヨこしまゝ）ゞましき代云也

一ねさげにねさむや。妬。ねさますもねさむや

一ねられ始めぬまゝに中河までのる

一ねびねて鼻のこゝらぬさ海や

一ねこねて いまさねてハこねどもとや。なまけまづハ藤

つぼをおぼし出て。まづとのあくら。菓れ根に寝をさんくさり

一ねび人 年れよりさる人や

一女別当 妻家れ女別当を妬

表式にこしたり。妻家別当や 一助 今れ世にも院家開白家

などに御当の房とてす

一念佛衆生摂取不捨 観

無量壽經す

一女房のさまたひ 基盤一本や

一ねさけなどし始 年三正五九月。六月日元。天帝釈此月。

南州遊あふとこゝ兆星ニ

一子日 元日子日や。十節記曰。

正月子日登岳遥望四方得陰陽靜氣除憂惱之迷

一ねきこと　称宜言　ねぐひ事也。又神にいのる事

一子日なるに　賀の角日也。正月の子の日恭例多之

一ねうくと　ねもとすくむるをいふ。花　猫字の意めうや。

ねうは女言通する也　一女は后をあるやうあるまて

何女条二条后の業平朝臣に通給しまするとも云ふ。後撰

云ことゝでさて後京極のこやを取にけり元良のこと

此歟也

一ねちけたるこれ　花　若

君のりまれこと彼の給ハ私勝たる説なるべし。ねぢけたる

ゑ口ゑくがましきさ心也。今好の給につきて。いひごとの相

なるべき心也。弄　ねちけたるはよろしきよしも。爭をくひたる

さ海や、さぬ所とハざれども也　一ねん仏よりも　万事ノ家ニ生皆、
捨離シ専心ニ發願ヲ向フ西方ニ　一ねのこれ餅　子ハ亥の翌夜な
ゆゑ依て、子のこの餅と惟光ガ云、三日ノ祝を子のこと云ふあらず
なり
一たすくしと河柔やゝいしゝや、或ハちまたびゝ同心れ仏ちまび
し繋字也　一たすぐしゝ　平也
一内侍のすけ　典侍・尚侍・掌侍・令嫗よりさ紀ニ此使し
ゝり人と心うべし　一たすさ人のすゝ郡ニ出けん
揚貴妃のすゝを云ふ、方士ハ既ニ貴妃ニあひて、かんざしな
をてくゝり、玄宗ニうせゝり、是ハかんざしぐらりまて、更衣ニハ
令嫗ハあハざれバ、ぐくの名也　一中ゝ　くりてと云心也、世俗ニ

云けるとてハなし　一なまめかしう　嬝媚(ナニメク)　生花(ナニメク)

なまめくハ二の心あり。嬌(ナニメク)みるを云。女郎花(ヲミナメシ)の哥の心也。又生の

まゝなまめくと云ハよめくしなまめくしくなるなる心也

一なずらひ　よそふる心也　一なづさひ　なれむつる心也

眤近(ナツキ)　狎近(ナツサヒ)　一なめし　無礼(ブレイ)

一なかはしらかけて　かけゝし路　長橋(ナカハシ)らは清涼殿(セイリヤウデン)より

紫宸殿(シシンデン)へかよふ廊(ラウ)也。此所よ東の庭より階(キザハシ)あれバ

橋(ハシ)といふ也。ここへ出て舞踏(ブタウ)しぬれバ礼儀(レイギ)也

一なよびか　嫋(ナヨビカ)也又やはらか也　一なまくれ　ゐやゐやしからぬ儀(ギ)也

なま代人のくちめ　是ハ儒生(ジユシヤウ)なるものゝ人なれども

狂(キヤウ)ゑなるらに嫁ならとつくかゐ生人(ナマヒト)へ法大史

一なまく花 なまくとは、もれてなまくなるもなれ心

一なまつは なんなりとよむべし 一なと なんとよむべし、こゝ

などゝと云所もあるや 一なまし ごとり なましとよむ

べし、亜衣(ナヲシ)やさしぬき紙略(ルヤク)してなどしかくるや、熱別(ウワベツ)を

さしぬきになどしをそへてめもてもれなるも

一なまくしかやりしかなるや 一なれめは 大方にこ云心也十一

かなしぬるや 一なまく世のあらさ海 何やかや

と云心也、又なまにがしかと云心とも 一なまびやりしかなる心也

一なまく人をろく 媚心(サマコロ) 一なまがし 右馬(ムマノカミ)ながるす、熱なり何

りしい人のすもそれ何りし、紙るすをも云所にあるや

一なまてうゝとか何すりと云心也、又なまてうゝとなまさなど

云ハ雖(たん)ずべきるすなき如なまじいなべし

一なすが神うちよりかたかり　内裏よりも左大臣殿の北面へかた
かりたるや　此ごまりをもうじきや　二条院も大内よりたれこ
の方也　天一神といへり　中神ハ中央(チウアウ)の神也　長神　安説也

一中川のもとり　今(イマ)の京極(キヤウゴク)川也

一なすげしのしも　産(サ)殺(シキ)より下也　しきねをもなげしと云也

一なまたけ　しなくともなれりたる也　よのなかき行也

一なまくなりしも　なりになきとの心也

一なかめりち　もの　ぬまふと紀のさ海也

一なまくかめくんうへまきて　ひとへかきねのまに　うちぎや
ぬけは不分明(フンミヤウ)といへり　一なまいがしろは　うしろへのけ

てむどけなくさるや　一なほくしくよれつるや
なほさりと同心　一なすげのかぞいけひなげのか
さけ、いづれもなげやすさ海の心や
一ならひ農やつくりれる　一しまもたうらい　金剛蔵王権
現過去尺迦現在観音當来弥勒也　弥勒出世の時地に
しくべき金を海まり給神や　一なまがしの院　そんじやう
そこなどいへる心や　河原院のことや
一なぐいめん　花　亥一訓に門竪時のふるを葵もそれのち給
給のなぐいめんあり名倡をいふ葵とよとのねせう給給ながら
いふ名をとられてなれかるや　此次に滝口れとのねしまと云
一南夏のをに世継云貞信云のこと武徳夏の松原を貞信云とを

まだ時毛の生そろはずして太刀を取て引らむ。勅使となりて
のせ人ハ、斜ならずとぞ　一 なまよあしぬれ衣のか
あしぬ心や　一 なまをさら 大かたみするや。等閑くして
余沈まりぬるをとぞや　一 なまくしも 弥勒の世を祭り
説ひしを出說すや、いづれの世にかと、来世のこすや
一 なまりしの説教　荒恩説教、男ニ小山説教見ニ栄花物語。
一 なまくしのさけ　冨士に対してへバ、浅きれざけとや
一 なまさけあるき人にあらゆるは　成人せバの心や
一 なまよみげなしに　いろはや古今の序よまるしふ人の和らる
一 なまずちあれめなるこそに、打まじりと海をざまをくん
法氏の心は、若つゞいはるとござりますもまじり法ぬぞすぐ

れたる所にはとりあつかんのふとほめのふ心也

一なぞしこ所えたぐ申しきぬをなをもさこうに　なぞしこ
ハ玉かづられるすをもさこうハ劫(ゴウ)也つゆる心也人のいたむべき心
也碁(ゴ)のこうも同心也　一なすさぐのすち　中古(チウコ)のす
ちれはなとも　一内教坊(ないけうハう)　昔(ハカシ)ハ大内にて御代
とらしとも大宮(ヤホトノ井)といへり女房の学文(ガクモン)をし又舞(マヒ)などなる
ふ所といへり今おほどのねといふ所ハむしこを詠(アト)とも
一内侍所　これをかるさ女房どもれある所也内裏に天照大(テンセウダイ)
神(シン)(カミ)まします所也　一なす代しもがちなる俗(ゾク)に云を
せのおもてのやうなべし　一なぞらなうくろきうちさ
紫(ムラサキ)のかるさをもれば浅(のち)にくろきいろになるや

一なをしもうしうへ　表裏同名の濃也。花も旧流也。花上に
いへる今やうなはこさぬをいふなるをこれなをしに今やうなれら
ら表同名ならをいふなり　一七日のきちゑもてゝ　白馬ひる
よりのなり也。天武天皇十年正月七日。御尚女殿宴
一なやふとて　追儺。十二月晦日。除夜に儺を追事也。鬼や
らひと云。追の字をやしふとよむ也。儺の字をなまやしひとよ
むや。始自禁中追諸家　一名ようされおひ　昔の名あり
玉帯には落花形鷲通天など名を抱をしや石帯などのなり也
一内えんなど　正二三月中に清涼殿にて文人をめして詩を
作り誨せらるゝなり。主上并執柄。赤色袍を着し。保元
信西より行て後は始らるゝなり也

目中抄

一なかれほそきれ　十の絃を巾と用ゆれとミ云是八一より七まで
一ふとをは八九十を中の絃と為巾をほそきと云也。妙音院の流ニ
八一より四すぢつゝふとをや。中のそくばちとほそくするや。大方中
は細きをと一忘得秘説や　一なまくしバくどや　内侍と中将
とれ中絃ばかりをふとをにつやゝて。常をもてなすとやかど
はうろや。常のこまよそとう。師説句や
一南殿の桜のえん　南殿桜宴ミノ外花ノ宴の事此例多
之。南殿ハ紫宸殿也。嵯峨ノ宴ノ例。嵯峨弘仁三年ニ神泉苑ニ有花ノ
宴ノ事是ノ初也。南殿ノ嵯峨宴ノ例。村上康保二三年ニ於南殿ニ嵯峨宴ニ
宴ニ云ミ時。探韻ノ例延長四年二月ニ例也。又嵯峨宴ニ詠賦ノ
ス例。天暦三三十二右ミ地下詠人ぞうりまで。堂上の詠

ハちすりさえ

ミちり

一なす紙あらじ　此まゝハあらじ

一なすけさまび　玉の出ぬりを

むもひこむりるハ吉侯云偽にて陰陽原にすりや玉ハこゝろの

哥を三反誦て下ゲくのつま紙浩ミ云々

一夜のれるをし　本妻の服も三月や源ハ更衣も給ぶ事

名もいさゝかこまやかるり心ざしの浅深によりべきるなり

ひもぞら拵るをもてハ夜のひもの損じたるによりて名人

ならべし　輕服に紅の緒を用る定子皇后の喪に御堂開し

白火を下襲をハ着しあらしこそ

一なす紙面風やまず　花周成王の時周公旦東都に入給事を

引ゆへり　在尚書

一なすげさつゝあしの　此哥

心得ぐるさよし詰抄ハ万葉哥を本哥にてよめる如べし
能冥しるる也
一内大臣になり給ぬ　花　大納言
数さゝまりて正になり給ひん所なくて権より内大臣に成
給くもゝ事とハ権大納言にて内大臣をかけるゝ也さてまゝや
がて拝政志あるべき定あれども事しけき職ハいかゞとて致仕
大臣となし給也　弄　数さゝまりて　一勘　数とは左右乃大臣
のすゝや依無闕左右の外に内大臣の官をとるゝ心なり
一なれをとりハ　此門佐にあはせて中れをとりといへる也夕
霧左大臣なれども未に大政大臣にも成あるべきや
一なれはれはもしへ　花　代始に八十鴻条ハ難波にて典侍
の人は衣をもちて参向して解除するなり事これこれ難

波のうしへの例や

一七瀬　七瀬のこそぎ今の世は
も毎月ゑことや。を京の七瀬を京の七瀬と云ふ在て京中
にあるハ諸国をよせたる心也　桂　賀茂　鳴瀬　飛鳥　難波　志
賀　鈴鹿　山田や

一七日れ出よろこび　弄　年始乃
礼のすや。或ハ七日ならどに糸給人もあるべし

一なべて世れあれ　世男れるぞらにとひ給ても男女のまじ
りなをじと。夫院に成女人ハ今もちかひしるを神のいさゝ給
ちんとれ心や

一なりたし　風俗鳴高　なるも
たしやおりたしや。大家れちくてなりたし。おれのなり
たし　一臣　をとなをそや。をとなせそ　二臣　あかゝ後こんとせや
みそなれ　三臣　或大家と男　弄　不詳由や　討ぞりなるべし

一なりさうじを　中の弓は障子也

一なをしなど多ゆりされて　又節など直衣をゆりさりしなり
ゆりは宇治左符記妙音院相國は雲衣をゆりされずして
無二糸内一也　寺　六位禁多丸云々多ゆりされてハ詞のぶらや
たゞ成しゆりさりや　一祿此説

一なりはこのうへ　をとゝいの中は兄と云也

一なりはあやは　柳無二氣力一枝先勤池有二波文一氷尽開

一なでしこはほそなが　なでしこハおもて紅梅うしろ香也　此比
の花も卯花がされを云ふや

一なくこ忌もしてぬ　蛍はおもひぐる人のいひけり前ハ
浴ぎとや

一なでしこはりぞは多しとる

若葉(ワカバ)の名ハなそしこの葉よりくだる唐衣(カラコロモ)や・我ハ薄萠黄(ウスモヨキ)

一 こ河海(カカイ)よりくる相違(サウイ)なし　一 なき戀こそあれなきしきさハ・

とさしめ祢(テイ)や　一 夜の月(かゞり火)なきさほどハ細夜のう

一 ちとせ經しくれバ秋といひ・秋の中もあつさ時ハ夜といふ心也

一 なぐさみ(のわさ)名よ立(タツ)や　一 なすびうる(ミゆさ)　長哥や・長哥(チヤウカ)短哥(タンカ)

のくり家々の口傳猶よよ出る・我も三十一字の哥を短哥と心うべし

一 内侍のくれ内裏づく(なまら版)　參内(サンタイ)なくても・内侍の官(クハン)をアらくかるする

一 内侍所まことおほかれて(まきそうら)　内侍(ナイシ)司(ツカサ)の中よ・尚侍(ナイシノカミ)典侍(ナイシノスケ)掌侍(ナイシノジョウ)・女孺(ニヨジユ)

此四等(トウ)の官よ・霜月ハ女官也・内侍のくこのわれりく京つどふ也

一 哥 なぐさく　紫(ムラサキ)ハさいはゞ色さよく　なりゆへや

一 哥 たまさかす　らくかへらく・かくハまぎらくなどれ業也

一卅哉のうらハなかくらおりや　中〻よそ〻くありかずまてこそく恋にけれ
一哥　おもなしや　帷光(ミツノスヽメ)女なくらく恋てあかひと云名も忘(ワス)れなや
一哥　なれこそこしまし水ハ・去く清水(シミヅ)や
一哥　おもき人の八雲(ヤクモ)御云・出る水をいひしわれ水と云ふ・小井(チヰ)やいふ
小河じ云も・鑓(ヤリ)あるども浅(アサ)てあるを云や
一君と　よそほしくき人のなりひまでぐく　器(ヨ)常(ツネ)の人のよ
てぶまおろくおぼゆるま・まして上臈あるども天すハいとま夜(ヨ)
だもぬるや云ふ　　一内親王　異同云　女(ニヨ)尼(ミヤ)女も・親王宣(セン)
下(ゲ)まて号(カウ)するまや　一韻合點　一古き代法なりの言　事様処(ジヨ)れ
残(ノコル)雪(ユキ)街(ガ)鼓(ク)数(セイノ)前(ヘ)来宵(タ)塵(チリ)　庚楼ノ眺めと　白氏天　子城ハ小方ノ城・街ハ鼓こ
云(ク)ふするじ(ジ)言の(タ)つこしや・人の来む不通(タアラ)る・ちかもあるよしや

一 哥 すゝちを 源の心ハ安三家との弓を隔つゝ程の雪にてハなかれ
其心ちなやましき故にと物の演雪に心のこゝろれハへたゝつ
やうなるとや

一 すゝいけう 円教なり

一 すゝしゝ 朽 ナダラカ 論語

一 拍木 すんちがちにとも 此意を拍
木に似たるなどの給ひて是しめせどもとれ心也 柔ラテン 女ナンヂ 父
似たるなれといひし詞也

一 すゝいめん ミのり 名野面 ナタイメン 后宮行啓 ギヤウケイ
養小山抄 キ 六府次 フジ 拘以下一員 イン 近 ニラユ 清 グブ 供 ツ 裳 ヤ 月 行幸 ソ とゝ 外宮 ミヤツカサ 司兼 ニ 中 ナ
拘者 ノ 弓 ヲ 弟 キウセンヲ 供 ニウギニ 入 ニ 後 王卿 ケイ 名野面 宮 ミヤツカサ 司 ツ 之 ヲ 法 ヱ 清 不 ヌガ 脱 ニ 弓
弟 ヲ 忌 ツク 饗 キウサニ 座 名謂ハ行啓の時也

一 すゝくゝも 哥 まがうし 床 とこ を鴈 かり のとこよ
りせぬへり

一 すやしさん なやしふにおなじ

一 竹川 すゝそもぞ 何としたるすぞとや つゝき 虫ハヂ 恥 ヂ て 辞 ジ しゝる心也

一中やとり　南都下尚人宇治を中やどりとれ

一なまぐるもいつら　史記曰孝惠帝崩太后哭泣不下呂后本紀

一なまよがしの念仏不断念仏なるべし

一なまぐるなる句を　涅槃經　阿含經説同之流行無常是生滅

法生滅々已寂滅為楽　雪山童子求法夜叉飢るに全身をあ

へて法を望てす石をべき書付ぬへり鬼ハ帝尺童子ハ尺迦也

一なまぐれハ月ハ山より出て山に入拘なれバもぐらく我も又引来

いかるらんとれ心也

一なまよがしれみこ　西宮左衛門子

なれバ宮なるらねともみこと云ふ西宮左大臣庭前霊物降居樹上

詫前様小児孫び侍　教作者之本を盡字兼請混習授秘手曲

小児醒　唐廉義武之夫也　校

上元石上流泉曲

一なまとし拘とり　出拘縣呂或ハ

京官の除目（ヂモク）以後、執筆（シユヒツ）並拠を申行也、或ハ除目以後毎三月經（ヘ）て
もあれ、ちん爰除目參（サン）忌（キヤクノ）事、並拠なを守る、並拠と云ふ也
一なかうど（ヨヤ）　中びとゝかれまても書牛（アヲホン）にて、名（ナカラサリ）去なかうど云
一なをしきて　武（ブ）官ハ如此　一なをしの筆　あ紙筆が紅にう
つかてまびいろにかよひたる文にぬたるを
一なすがこゝるを（かけるふ）　三十ケ日の職（ケガン）に觸（フル）也
一中にけいて　大底（オホムネ）四時（ハ）心趣（スヘテチヂコロサリテチカニ）苦（ハ）就中腸（タ）斷（タヱハ）是秋天　白氏文集
一なとくねるまゝしほに　極（コウ）仙（セン）靈（クワ）に如此とひくをきて云更
一なすにひ（ゑるらひ）　僧都　横川（ヨカハ）直心院（エシンヰン）　源信（ゲンシン）僧都に比（ビ）せるを
一なすにかそれえんに　法華經ニ仏ニ稱從（タヱハ）縁（ヨリ）起（エン）云ふ

源氏目索巻第四

ら

一らうくげ いとしきなどれ心也 ぞめくる心也 おけくとしたるや

一らうくう 労なるもいくさる心なるも

一らうがくしき らうぎきなる心也

一らうのる 廊下也

一られへうし 羅表紙也

一らうくじう 良くなつしきや おほとうよやさしくさくるか心

上らうさき分よくれるも

一らうをめぐれる 繞廊紫葳架

交砌紅葉欄 白氏文集

一らんさう 乱声 らさうこ

りさくるかなもあるもらんさうこ 一 鏡

一らまれ茶のらんの茶也 俗名よいむすまと用也 紫苑 さいほ也

一らてん 螺鈿 かいぞすりてつけたる也 俗書貝といふ是也

一らいしとも　菓子(クワシ)などいふ揔也。墨子(ライシ)楔子(ライシ)。ともかきたれよし。ふ
ちをとらくまくろ揔也　一らうめうくろ　廊下(ラウカ)也
一らうげ　老気也　一らうし結　紙ずるやうに
くさくろぞもしまゝ　一らうろう　牢籠(ラウロウ)

む

一むねあくまで　むねのうちからからを云也
一むしれうとまるずして　文衣の在世(サイセ)ごとく。涼をつれて
余内(サンタイ)志あへとや　一むつび　むつましくすりを云也
一むえん　親主の外せられとせられ　親主ハ一本(ホン)より四本(ホン)まで
ハ見(シン)也。女体はあくろをばかけいはず。無本(ムホン)といふやかたま
も母方(ハヽカタ)の親族(シンゾク)を外戚(グハイセキ)と云。外孫(ソン)の心なり

一むすびつら　源氏と葉の上の…

一むすびつる　源氏に葵の上の葵をとる。こゝは紫は元服の時
のもとゆひの文也。おせしは文のかりしずいと。源の心かりしずいとも
男女のもとゆひ紫の糸まてむすぶゆへなり
一むつれ　むつましきや　一むけに　無下
一むつごと　むつましきことや。親云
一むしのひにきをへる　夕がほの泪にあしそふ奴べし
一むべくしく　宣く歌也　一むさい　お気ちきとれ也
一むくつけき　おそろしき心也　蠢　貪　白氏
一むつかしく　しらすや　一むひつぶれて　さもれつぶる
を云也　一むぞんに　無盡
一むべ　げにや　一むねくしかしぬ　家のむね

まかけていへり。大なり家なるしぬ心也 花 拇の棟梁(トウリヤウ)なるしぬ心也

一むかしまかんへんくゑ 三悔(ワ)の明神。或(アル)女まかりひ給しまや

三悔明神は御母なむちれ(ミコト)ぬ也 一むさ御り 貪(タン)

一むかし拇紙などにこそ 寛平(クヘイ)法皇河原院(カハラノ)に御遊の時。鰐(トホルコウ)云

霊(リヨウ)まて。御息(ミヤス)所をさ夜ふけんとすり時に。海(ナンチ)は后下ふ。我は天子

ふるもどのあへぞ。清(キヨ)うきくろといへり

一むろの戸 室(むろ)の外(と) 一むかし拇(まつむ)ふり うつ御のとし

かけ女 仲忠大将女也 十五六にて父母にをくれておぢれふり所にをと

うしを大臣にて 出ふにもあまた声をぬ浅茅に移すむらん

人としぞとふ 一むらさ紀のまひをくれ 出ふも

あくこそそむり拇也。久しくなれバそこねふりや。父あひのをくれ

ころやし

一むしとうちまとひ　口なぐつき

ぶるぶし。いさゝかまとひ給也

一梅の芸れ給ひとみくれ山のを

とめ代ぶ山すてゝ　求子(モトメコ)也。其日まていこうさの山とうたふ。餘社(ヨシヤ)

ていい各(ヨクく)を君(キ)をうたふ也。呼　風俗(フゾク)の方と花(クハ)にまた。求子(メ)　猿河(スルガ)舞

うて。東(アヅマ)樋(アヅミ)にまた。風俗ハ別のまやと云ゝ梅の芸の文のごと。こうさ

の山のこと云ゝ、ひ物代。ひたちの家とうたひたきと云心也。三笠(ミカサ)の社

いかしまたわ出あへいかし雨。ひたちあれバ。よそへてひたちの家といい

まほしきとれ心也

一むもんのさくらのほそあが　織(ヨリ)

物也。梅の文ハ面うすく。裏(ウラ)ハこき。蘋芳(ヌハウ)也。細長(ホソナガ)ハ幼(ヨウ)の貴女(キ)れ恵す

子もれ也　花　おもてしろくうらすきうをぼくらんといふ也

一むま場(あつひぐ)のおとぐ　花　おとぐハ乙(キトト)殿屋(ヤ)とて。左右の馬場(ムマハ)ありて。

五月の騎射の時、中少将の着陣する事也。葵祭・大内の時も
此の陣をこそ一条をあへとするなれ。左を乙殺の往をする
物也
一むらさきのつぼみなか　紫の
ひとまとらるゝ也
一むもんのうへのはぞ　無紋乃
袍は夜穀冬平絹、色はつるれ袍のごとし。同云無文の冠其
指貫は付　一吾冠無文巻纓、昵者は無文の羅を用也
一むくひらき　當服也
一むもんのはちまき　今頭次戸
無三夜位人や仍着也
一むまやれはおさたくしらしする
河菅義補とひの外は流されへとも給ける時、もち夜の明石のむま
盛まとてまうけるに、むまやのおさいらじくおもひける、給ひれく
してゆくもあける
驛長莫驚時変改、一栄一落是春秋

くしとは口詩(リシ)也。抽まも出つけどして。只ゆふ詩(シ)也。只今文節に
哥などにかりし給ひ。譯(ムヤクナリ)也。菅丞相の詩を作ることもしれたるに
なずらへたるや

一むしのかしこき人ぞ流人(ルミン)
の詩(カヘリ)なるは。菅家(カンケ)を初てなけれども也

一むとく無徳(むとく)

一むしのかしこきとしたるに也
史記(シキニ)曰。大君(メイノ)ニ下久不居(モニハク)。後漢書(ゴカンシヨニ)曰。位尊身危(アヤウシサイ)。賊多命殆(ヤヤウシ)。
文選(モンゼンニ)曰。才秀於林(ヒイツレハ)風必摧(クダク)。行高於衆(シユウヨリ)人必非之(ソシルタカラ)　運命論

一むし母君のはおぢ中務宮　醍醐(タイゴノミコ)は子中務(ナカツカ)兼明親王(ノ)出在(サウ)
在(アリ)大井川(ニ)此親王を明石の上の母君の祖父(ソフ)といへり

一梅のおりはてふ鳥とびちがひ。かしめきたるさしろきうれかん。白き
うきもんのどりはなきうちれを重(カサネ)たるや。これと云ひこむしこれ也

こゝさ紫のうちくろハ光多(ヒカリイロ)あれてうつくしきや。雲を白く重さ
れバけたかくミゆべきや　一むらさ(斉こてふ)紀のゆへ　玉かづしハ深のれ
むすめとや。紫の一もとゆへの心也　一むね(ミゆさ)くもをきくろ　おどろこさて
弓こゝろや　一むかひ火(まれそしら)にくわて　人の腹立(ハラタツ)に
我も腹立てもや　日本記　日本武尊(ヤマトダケノミコト)。東夷(イ)をうかし時堅に火を付
くろに。あるくとよりも火を付るもや
一むらし抱がくろ　住吉(スミヨシ)の抱伝のもの。皮嫡女(ノチウヒヨ)をバ父ハ怒(チヽ)にとひしゝ
ご。繼母(ケイホ)のいひしなよりて。とろかに成るもや
一むらしのあるがしがくろし　後撰(ゴセンニ)云大納言國理(クニツマノ)朝臣の家に侍
けり女に平定文(タイラノサダフミ)いと思ひてかくしひ侍て。行末(コクスエ)まで思ひ侍り
けり此(コロ)女俄(ニワカ)に贈(ゾウ)太政大臣にむかへられて侍になれバ略て此ものや

一むらさ紀にかゞとハ　かゝといかけんとハ紫のゆかりと云ゝこつけゞと
ぬべし。松よりゆゑてとハ松より咲こす茲なれバや松を約によせたり
一むらしの例をあらはしあて　花　あらはしあての詞に政不政の二の心を
源氏ハ此君太政大臣なれバそれにあらはしあて院司など補ましら
れたる心也。又諸に太上天皇の昔の例をあらはしあずして院司か
ゝ定られたる心もあるやそゝ　一むらさ紀の雲に　慶雲書
星とて天下一統赤陽にゝゆるすや
一むらしもやうなりたるにハ　是ハ嵯峨天皇の女に名をう
しろゝをえらひて忠仁公を聟にそ給ふをいへり
一むこの大君　義貴の聟といはんとすれバ太上皇也。又太上
皇といはんとすれバ又臣下の聟のあつかひなりといふ心也

一むかし抱がたりまも抱えさせたりを花七大寺罕なるどへ
此誦經抱切經殘を施入されしまを引望
一むかしの世にも年号たりはめでたきされるや
一むかへゆまおり先一院人の此湯にまいりて後此むかへ湯に
宣旨まいるや先明石上のまいらぬへる如ぐし
一むまそひ馬そひは尚時中宮ほどの者と云々
一むかし此人はあめつちをなびし糸書云琴動天地感
鬼神云々
一むしんの女房無心
一むかしの世にもなるやは伊勢抱領に業平の二条后をぬすみて
おたりしまるや
一むかし抱がたりまも されく無情
などれるす如ぐし
一無言太子 河に無言太子波羅

奈王(ナイノ)とくたまふ。名体魄(ナツクキウハクトカタチタンシヤウシヤレテ)。容端正(ヨウタンシヤウ)。生而十二年(ニテ)不云(モノイハ)

一むすひとく　はふとかぎらなりとも。法華經に契とく中にたえ
ぢとなり
なりと云心也

一むかくしさすぎ　俗(ゾク)にきれむら
一むかし抱がたり　うつ不の抱訣に。
とりげかむすめれる。独(ひとり)ゐて琴(きん)引しを。今其君といふ人にて
しるあるを

一むかし　おぼゆる人をもつ
を　漢武帝(カンブテイ)に董仲君(トウチウクンリ)。李夫人(ソカタチルニ)。良給(スヨンセキヲ)に温石(ヨンセキヲ)

一むかし別をかなしひてかたねを　観音勢至(クヤンヨンセイシ)同位(ヨンヰ)の昔(カシ)。人たる
子にておりしましけるに。継母(ケイボ)の為(タメ)にゝあたれかれば。それお
やのかぎねをくひにかけて。つゐに仏道(フツダウ)に入給也

一むかしハ　生田川(いくこ)のたゝす。女人にて二宛元　大和抱がたりにあ

一むかしいとこなひさし　或説云昔染殿后皇后なるやこの時金峯山より久修錬行者来て加持しなる平愈の後本山に帰て年来の行業を廻向して鬼になれり絹青鬼と云常に后をまづらりしなける後智證大師ねんごろに教誡し給ひれど絹青鬼もだらる事あれて其座にありながら一所のやうに成て其ことにはなり其後后本のぬに成給はなり云々答和云此記にこそなり

一むかしはれたりのうち　住吉もれだりに似たるものなり

う

一うへ人　殿上人也雲客と云も同し大納言中納言よりうへの人也

一うちしきなるなりし　毎夜昇殿を云也

一うちもしけるどれてこそしこそおやしきけぶ後して

打渡(ヤキワタ)したる橋(ハシ)也。渡殿(ワタトノ)のきりめんぞうに板(イタ)をおきたしてうよふをいへり。若村上(ムラカミ)の御時宣耀殿(センヨウデン)の女御と。殿壺(フチツボ)の中宮(チウクウ)と。御物ねたまのましにそれにかたぐの人。うかしこれしたるに。不淨(フジヤウ)をまれちらし侍るすをいへり。さて御送(ヲク)りむ人のまきぬのをそたへぐらしといへり

一うへつぼ　對屋(タイノヤ)ありて。殿上(ツボネ)に房(ツボネ)と給を云也。又中宮まうのぼらせ給ひかは。清涼殿(セイリヤウデン)の二間(フタマ)を上の御房にしつらふ也。ひの御さへ給ひたるに二間を上の房といふ也

一内ひろも　内裏(ダイリ)也。此物語に内とあるは大きな内裏のなる也。所によりてそれ殿(トノ)の内のなるもあるや

一うしろめたう　河　歎讓(エイゴ)(ウシロメタク)心もとなき心也

一うなりしうきれいなる心也。麗(レイ)の字也

一右近のつき　禁中(キンチウ)にて実(イ)の一剋(コク)よりも右を濟宿亜(トノヰ)を始てなの
りて子(ネ)までに門とむりやさて右を来る丑(ウシ)の一剋より宿亜をとる
してなのしすりや。さてこそとのゐよれ声(コエ)。丑の剋より始めるとや。右近の
目(ウカサ)は丑寅(ウシトラ)まで取(ヤ)りや(キヤウ)
じきや

一うけひくまじき　義(シヨウイ)別(ウケヒク)すま
ゆめなりバそしらぬ人のおもはんとや。又ことぞ思はくていはれず
始めぬべきとや

一宮多れ此門のれいましれん
寛平(ノ)遺誡(ユイカイニ)曰。外蕃(クハイハン)之人(ノ)必(ヒトス)可(ヘキ)百見(メシミル)者(ノ)在(アリテレン)簾中(ニ)見(ミ)可(ヲネル)。此義を
なれて。河海(コヽ)には寅(コヽ)の詞(コトハ)本文(ホンモン)と遠(タカフ)と云ひ。若必(カナラズ)の字はめさずして叶(カナフ)
まじき時のよりや。然ハ打まりてめすまじき也。さてこそ云ふ

一うれかりて　うれへや

一うけたりて　諾(ダク)受(ウケハル)咄(サウタウ)お聞の心

一うへの令嬢　内令嬢外令嬢とて有。内裏に伺候する女を内令嬢といひ、それを上の令嬢と云也。外令嬢ハ臣下の妻に成る女を云也

一うちまのさかつきひよう　内裏のさかつきさかなや

一うちつけ　やそへしまるとある心也

一うめさくら　気ありあれしき也。又詠ともに云。所によるべし

一うけにあれ　器量の人といふ事也

一うみづら　海の辺也。河海類

一うかるゝ　人の心のうかれもうかるゝと云。又春来るとあれ多乳かくらる
もしも云也。月のうつるハうつる也。又月の氣のやどるをも云也

一うちつく　乳納ある心也　一うらなく人　外の人、他人也

一うつさく　うつりし也。又うつきれるをもいふ。所によるべし

一うらもなき　何心もなきを海也。うらなくと同し。心なくや

一哥うちそらふ　罵ふきそふは。左右臣宮志のるこうちをどしらるるや

一うねこと　和(ウヰ)すや(コト)　一うしそ　うしそこや

一うちくせん　かくや。うしなど後打(ウツ)也

一うれくく(うつきこ)　うれりしきや。うれ紀と同し

一哥うつきこの　力をくてとはせこれもぬけらるを。力をふとゆへ

鯢(セイ)也。人がらも蝉(セミ)のうらにそくらるを

一哥うつきこのもは　伊勢集にも。深くうれまいせられど。蝉(セニ)は

ハ　ほとく家のことく。志のびくに袖をぬらすと云心也

一哥うぢそくか　優婆塞(ウハソク)は俗ながら仏弟子に入人也。尚(タウライ)来志尊(ドウ)

師をおがむ声(コヱ)をきて。六十六億七千万歳(サイ)して。弥勒(ミロク)の出世(シュツセ)

まぐのちぎりをかけて云也　一うれむしろ　なき人を莚(ムシロ)まて
つゝそ　卯(ホカ)へうつすや　倍(ゾク)こうれむしろといふ同しきれ
一うちかりしぬくるゝ　夕がれと源氏とれ衣を　手(タガヒ)にきかえし
ぬふを云也　一たをれ　夕がれめれとれ婚(ムスメ)也
毋もなくなりたるや　一哥うつきこの世　むなしき世とや
一哥うどんげれ　優曇(ウドンゲ)花にあひがたきなとへ　いへり
一うちすてかいぬくり　尼君なれば　よくもつくろりぬさ海なるも
一うへこそ　ひなる　うへは尼(アマ)うへとよひかけたる詞也
一うちき(まつむ)　褂(ウチキ)大小あり　褂(ウチキ)家一の人或はあるじなどれきる物也　さ
ぬのうへ表(ウハキ)　そこに小褂(コウチキ)をきる　寸法(スンホウ)は次第(シダイ)にうへにきるはを
めらかすや　一うけしげ(よりのか)　呪咀(シユソ)しのろふ

すをいへり

一うれしとりぬくる　源氏の名

とさるがらうつしとりたるや

一うれしふ心ちさて　源の名へう

つるだらり上気（ジヤウキ）をしや

一うちふくたゝ　びんかき給ひぬ

さ海や

一うね人女蔵人　蔵（ウチメ）宗女女蔵人

とはうまいひたれど女蔵人は宗女（ウチメ）よりもあるとしたる女官や

一うんめいそん　蔵　是は中の室（へ）の東の方にある殿（デン）まで問侍

所のましますや

一うつし心　現心（ウツヽコロ）や

一うき身世（哥蔵のこん）　さしながら草の原（ハラ）までも君（タツ子）ぬぐきるすあるに名の

ましぬへとあるは名のこずは君まじきすやとかたちたるや

一うれしき抱かし　その人の声とはさてなをうれしき抱かし

ひまた勝月（オホロ）とたしかるさしぬ心をかくめるも

一うさもんのうへのたゞ　花　今案、童女は晴の時も打袴のよう。
衣袴をさるうさもんは窠霰やよれつゝはよれ袴をばこそ。
打袴とはいふひきれ袴や　一うんはん院　河雲林院は淳和の
離宮や仁明天皇は変分しを給
一うけしざ海にて　うつし心まことの心やうつし心ならぬは粗乱や
一右近のぞうの蔵人　右近巫の蔵人中川紀伊守の男伊与守
がまや叙爵をべきる源除名に依て結局此札をけづられたる
一海のおもてふすまの紙ひきたりたんやうに　定家の明月記云雨
脚融地電光張衾云ゝ　一うこれ中れはうこれ　是を表
火ゝ出見等を源氏にたとへ紛紛の老玉姫をあはをなかし
をあしれの名の如くなずらへてかける物や

一 うえまず神の 花 経告明神ハつくし 楊の小戸の 垣 ヲドヲ 洛 ヲトヲ
ひ出ぬる神なるによりて 海まず神といふ 伝 又海中の 誘 リウワウ
ま 乳 クヽ をそてぬかしこるあれど 誘 をも神といふんまお 遠 イ
あるまじきや 八百 舎 ヤオアヒ ハ 八 室 ヤヘ のごとし
一 海にいかなさきにのぼり 花 出根哥 方士 ハウシ 楊 ヤウキヒ 美妃 をもとめ
し時のうまに 三者 カミハ 碧落 ヘキラク 下者 シモハ 黄泉 クハウセン といへるごとし
一 うしなくもせひ 松より波のこゆるハ 東の松山よりをられ
一 うちつけのまれ 花 せちぬるといふ おしみうへのうまをいへる也
一 うえ松や 海松 ウミニツ とは うるのうまや
一 うへのさぬのうさうすき むらゝ紀も あけもみどりも 紀 ノラキ
よりて 浅深 センシン なるを云也 三 一 うけん 人をのろふを云也

一うつか　抽紙也　一うへの女房まへ志わへと　上乃
女房とハ典侍掌侍等也　前ハ右志わへハ右を云
一うちね松ハ　花文選ハ馬鬣松とかきて　うちひ松と
ハよこ侍わる鬣ハむまれてがこれごとく　さ紀をすゞにけき
ゝろ侍ク後云也　そのつゝ　おひたる松を　うちね松といへかゝ
へハつれ松を　おきへの形見とゝろかごとく　中ねの君をむし
さ紀のうへのゝたゝとゝろ心なり　略く
一うすゞき　さむき神也　一うへの女房　等　問　殿上人志
氣しすりを　うへの女房と云と河海にあるも　そらかにや　一勘　殿
上人の氣しすりハ　大内よりの心也
一鶯のさしづり　舞ハ　相訓れば　古院おりしまさぬるをむつ

一哥 篝火もし　火製哉代乃
れし笛こそ結
背に及ばぬ心ばをせおそかしけりや
一哥玉うつ うき鳩を　うき鳩は雅名末にうき末と云心也
一うきれひとえめく　うきままや
一うらぶれ 聚楽う川百也　一うたまくら 名末の哥をあつ
めくる筝子や　一哥うすく 柳細辞勝池紅
鏡之集　一うきづき 雅系窓人や
一うきかれ夜ものうれ者　夜民よおかず一世源氏の人の女也　是名処
うかの物語に夜深れ者とて一世の源氏よて太大將ますらう
と云人あり昔二人ありけり一人は太政大臣の娘一人は时の
九門の九のまうと居腹の女一の女也卑腹の九におうらめて

あてごとゝとゝ。こゝめ心すぐれぬくらかれば。其家をもじめなて。時の
いうそく罪(ツタ)侍へて心をつくすよつゐること人ごとに心つよくて。其家(トウグウ)
へ来わぬれば。源かねと云人は出家して。山に蒸(コモ)りておこなふと云々
一うち松(かゝり火)　松炬(セウコ)出てくらいさ記さい松や。かゞりに打へくとも寸板や
一うりさなるゝ(のるさ)　うりつしきや　一うすいろ　紫のうす色や
一打(哥ミゆき)さしし　打雪(ウチキル)や。くもり心や。行幸(ミユキ)に雪(ユキ)をそへたる
一うけたへ(夜ちり雨)　やうてと云心や。打つけ同心や
一右をのぢんのミかハ(梅うえ)　義和(ショウワ)の御時。右を陣(ノヂン)の御溝(ミカハ)の邊(ヘン)に地に
うづゝ。後代(コウタイ)相侍(サウデン)して。其家をたづへしと云々
一鶯(哥)の声にや　鶯の声とは。郢曲(エイキヨク)のことや。心ちゆん河原に。蕉(タユモノ)の
ことや。又玉かづらにもとあくがれし心をみべし

一 芳れねぐれ　笙行（フエタケ）とは落梅（ラクバイ）の曲（キヨク）のるや

一 うすされなをし（夜のうしハ）　うす菊田（それぎ）のなをしや　かしめさくるとも

唐綺（カラノキ）のるや　菊　白されぞとハかさるのさぬや

一 うぐれ法しのゝ忍　宇多（ウダノ）法師和琴（ワゴン）ノ名物（メイブツ）や　以檜（テヒラツクル）作や

一 うちまいり給人のさゆうをまるびて（若上）　女れなどの入内（シユダイ）の時を

まるびて　院（井ン）の御門（ミカト）より　源氏の御方へ御調度（デウト）などをたてこそるや

一 うすくれ　うすぐこや　一門よりれうぐやしなひ　御子

誕生（タンシヤウ）の時ハ　父御門よりうぐやしなひのる例多（レイシ）く

一 うへの衣のいろくけぢめさて（若下）　河　四位紫（ムラサキ）　六位六位緑袍（ミトリノハウ）や　云

一 うしろれかざりにさるし（ようふし）　若宮（ワカ）の御身ハさ紀に出て　ぞのう

しろまのうりくるを夜や　一 うちまきなどし　来（ヨ子）をまゝ

ハ今もまじなひまする也

一浦鳴の子が　此息所のことを
形見に持ぬ心なるも此ゆゑ也。其と云所へ心をバ不可付只箱右
にや。浦鳴の子　見河海

一哥　うらうらもび　又さしまさるハまへ
も小望にてつれなかしまれ望てさしまさるや。岩うどハ天の岩
戸にあふ坂をもせたり

一うしく星と　今才九云。主君女
毋史服一年

一哥幻　うさ世にハ　ゆさくえなんを。所
の字此心に重をもせたり

一哥　うへてこし　此法の時。筆をこ
家にゆづりぬひしハ二条院。こゝハ六条院也

一白家　うつしを　焼物のすや

一紅梅　打すひ　をひすぐひ　以才くや

一行河　うくひすかも　鶯声誘引来花下。草笑拘留坐水邊

一うたぐくのもれ　哥ハ付物。曲ハ采曲也

一うちすてゝ　此姫君達のすをよこしかへり。かりのこの世鴨のこ
よこせかへり。かりの子鴨の子也
一うらめしといふ　うらめしとは詞は世紙うぢと云詞にあたれ事
一うき鴨の　陸奥守にて下し時のすをいへり
一うつし馬　後の鞍玉馬をいへり
一うき世には　我身は山居してもうきふるを一筋やうに
ふるしたきとや
一うづち　持統天皇三年正月
天皇新万玉前殿乙卯大学寮献卯杖八十枚　卯槌の事
卯杖と同じく年中の悪気をふ心に杖を用れ年中行事に委
一内に文　内裏
一うどねり　内舎人と云り侍の事也
一うつを　うつを見也
一うき船と　うき船とひといふもの

は世にまゝあり抱なれども。ワガ身はかずなくて其紀まへもなしこそ
はわきまもれさひあると変定しあふよとなる
一うちされ人めして　装束等仕る人也

の

一のちのもき　七日くのとふらひ也
一のもきとらて　八月比の大風の名也
一のちれ師　法の師　三周統法の首尾也
一のきのつま　彩のもつれ也。つまは抱のもしを云也
一のちれよもひかべき　行束とをく　用意もたる也
一のちの世のねがひ侍所のあるさ所も　極楽の変絃哥舞乃
菩薩のるや
一のちにたんるを　五十賀の

時させまて、此度は大かたまさせまへとれ心也

一のかつ弓二月とあしとまて　馬をたしらせて弓射るをかり
弓といへり、正二月のうちまるまるを三月まで延引なり、[illegible]
三月も薄雲女院の御忌月なれば、又延引也

一のかつての世　あかつての世といふも同し　上古のまや

一のがかまし　[illegible]　御息所とおなじく煙となるん拙をとや

一のがかまし　のがかましとは、[illegible]の御位のまれ、[illegible]
別在、[illegible]世をあきらるまをおもれとおぼしめせとれ心也

一のまゝ弓れくかあるし　春弓をとるす、礼記よるもをとれるも、
正月賭弓をとて、[illegible]の大将里才にて還饗行へり、[illegible]
[illegible]大臣にて兼るも　一の[illegible]も　[illegible]

一のり抱　膳貢の勲抱也。よきのり抱ぬべけれどゝは女二宮の御
をの給也。菊賭とす　一のく　をのく心也
一のりれしと　僧類を法の師と頼たるは。却もひまりしぬ浮舟乃
すまてふこまどふとや　一のら　堅原也
一のもせ　君もせなどゝ云も便也。せばさ心
一のとめ　長原なる心也

く

一くらづきおさめ殿　内蔵寮　納殿　在家殿　蔵司とは御室
を垂取也。おさめ殿は諸王よりもまいりものをおさむる所也
一くつおりなと　退屈の心也　頽　河　頽堕
一くしあけれでうとめく抱。うとあぐるなり也。河　昔は女は更

衣下常に髪とあぐる事なり簪や鋏釵などや
一くもれる人も 禁中は洞にかくれて月とみるんずるに母あるさ
ちよの宮の月はなすまじう澄んされ心なや
一くまれおや 王親國母といへるすあれば成べし。我国のおやとなる
事は六条院の太上天皇の尊号をえめへることを給へらふぶれられ
ゐるといふすまれ浦へうつされゐへるや。おほやけのれうくめされ摂政関白
の天子を補佐してまつるも。凍民まいつれよ尊号とえめへる
一くびおほやけのれうくめすはその中ふと云や
一くもんさ 冠者や。え服する人をいふやくもさと書くる所もあり
一くうさん くくすは下や 或腐爾よこゝろえべし
一くまゐげるる く風ゐすもや。くれ所ともあるまゝれ次也

一くさまひ 稼(タキ)也

一くさ抱 草子(クハシ)也 柯子(カヲシ)の乳(タヒ)也

一くさぐし 河 細碎(サイサ) 春屬(ソク)也 けんぞくとよむべし

一くさまひ 稼(タキ)也

一くさ抱 草子(クハシ)也 柯子(カヲシ)の乳(タヒ)也

一くさぐし 河 細碎(サイサ) 春屬(ソク)也 けんぞくとよむべし

一くすしうらん くすこころ心也

一くろろざぎましく あらはなる

一くびほそし これりしげるさ

一くれなゐのこし 袴(ハカマ)の腰(コシ)也

一くちおほひて 袖(ソテ)まてうかをかくしたる様也

一くれがし なまがしくれがしこれかれと云心也 くれかれ同

一くちずさひ 口なぐさこ也

一くるんそく

一くくつ まう夜のくくつ也

一ぐりんもん 乳文(グハンモン) 若 室明親王(シヤアキラノ)

家室(カシツ)菅原氏四十九日ノ乳文(グハンモン) 後江相公朝綱書之(ソチノエノシヤウコウトモツナシヨスヲ) 見文粹(ブンズイニ)生(シヤウスル)

者必滅釋尊未免栴檀之烟楽尽哀来天人猶逢五衰
日ニ逢文之詞也　一 くらゐとくらしかうふりたまはる
爵を賜也。五位より爵位の初なり。蔵人をへて一級本となる
べし。正月五日に叙位に。六位の蔵人は必爵を叙して從五位下に叙
せらるゝ也　私云 蔵人よりもとのかうそこよりするや。かうふりお
どいふもかうぶりそと云詞也　一 かうぶりそ 功也。かうのくゐ
声也　一 くだらし 百済国の事也
一 卑下 くもそめてくやしと 浅きゆゑは卑下の詞也。げせぬとすべきか
こゝろもしかとは此心也　一 くものゐに心のかよふすや
くろしと云ふ心もなし。又くらしとはかうさる事もなし
一 事也 くもしられて 候陪膳女房撫をいふすなはち是也。これもなり

めしくおしき杵也　一くもや　さしぐと云心也

一くれなゐはかう　紫のるすや。紅乳のるすを云。紫のよれきぬや

一くれくしく　くれる人のるすをいくり

一くる雨のどう　轂（コウ）（クルマノトウ）　老子曰三十輻（フクノ）（ミミスコノヲ）共一轂（ミクノヤ）ハ者居輪之正中（サノワノ）而為輻（タリヤ）之所（トロ）以（アツミル）濃也

一くやしくもかさし　あかひはあ

かとあるぐらりまて。実（シツ）に不審（サルアス）とや。されぱくやしきとや

一くろきかざみ　黒汗（クヰカ）衫（サミ）女房（ヨウ）（ヨウ）服者（ブク）の恙（ス）

一くもんざうれもう雨　萱草（クハンザウハ）色黄（イロキ）色（イロ）也。服者恙くくはさうともある

一くろ（さうま）ぶのとりぬ　皮（カハ）のつさくろ本紙云也

一くまつ（斗）　ちをぐりぐしにはさ実（シンジツ）の心にていちまさしや。深の傾（イツハリ）

まづくぐさんとや

一くろさ丸車　服者ノ車也。板（イタ）

車ホを云也

一くろがうまゝにて　黒方蜜を

さゝぬ焼物の名也

一官爵ととしれす　源ハ流罪

いひまゝなるゝて除名とみしたりつゝさるゝとしるゝとハ除名と云す

也出身よりこのゝ、なりさゝれる官位を恵のぞこそ無位の人

まなるゝすを云源氏も除名せられしよりて無故の出長をさ

ゆふとゝしたり配流の人とハ必先除名するゝ也除名ぐらにて

流罪をしれぬすもなゝそれハ罪の軽重によるゝ也源氏の除

名ハ左辺の例を用ゝる也菅丞相高明公行平周公且なぐられ

すをとりて出てやゝ云々

一くやうかうゝもこそ　三蓋六

愛の行法也

一車ごもりさおろし　牛をハ

づして轅をおろしや

一くしけとこれぐりのとこわこ

のこゝ　櫛箱　中箱　香壷箱　うちこぶりの箱のふたの上にて
は髪をけづる時おこぶし給れば莒の名とあるや　箱

一くらもちのみこゝ　くらや姫に心をかけし人也　蓬莱の難到るを知
ながら偽て　りて　尋ぬる由にて　玉の枝を造おて　姫にこせける時　玉造
ゑるゝこの事て　禄の赤下をせかけるにて　偽あらはれて　無曲なる
き　竹とり物語にあ
　　一雲のうへに　正三位の誇にあ
るすめべし　呼　兵衛の御用意又正三位の中の人なるべし

一くらねこくのかりせるぬけぬる人　金光明經曰　獨拔而出成
仏正覚　老子經　功成名遂而身退者天之道也

一くらに　苦丹也　杜丹とも云　皮の類に云ひ

一くもりなくあるさに山頂のほそなが　あるさはさぬのすや　山頂は

面くち葉裏紅梅なりと云さて茎やうくもなきなといへり

一くろさかいねりのさひしきさ　かゝりハうもとぎぬのもかゝる
やさりぎへハ黒くなるや さいくしくハさやくともかゝるや

一くもゝ　昔武徳殿にて六日の節会行れて騎射のすあり
其時宮門有典薬官人おやめ成献ども又門侍薬王を太子已下
に給時くもゝ王を右の肩に打かけて左の脚へかれて二の緒を分
て脚にゆひて各拝舞するや續命縷と云なり只命を延る
いとひしるしするや

一菓わるとひたちの海　菓花
とハ近江表紙方によそへたる丸ひたちの海のいかにせて ここハ浦波
に立いてんと云へる丸

一くろぎあるぎ　皮なるゞを黒木
皮をけづるを赤木と云や

一くしく　左衛門督　延喜四年ハ

一 昔行幸ノ時。蔵人ヲ為源後春ヲ使ヒテ。維一枝中ニ多人ヲ出シ
ヲ。ヲ例ノ心ヲ

一 くちおしきにこれ一ツ思ヘリ
世人皆濁我独清衆人皆醉我独醒

一 くし人不 蔵人不愛ヒトヲ是ハ六条院ノ事

一 くん思ふ 蓮衣香くれえうう同

一 くしあげの内侍 一説云 内侍ヲ人のまゝ役をつとむるや事

一 くりん仏 國史云。義和七年四月八日請律師傳灯大法師位
静安於清涼殿始行灌仏事 雅古天皇十四年。始無等四月
八日設斎會 日本記

一 くましるどやうれ度して
来師ゐどのやうに身ちうう居若のよりゐ給ふをいくり

一 くやしくぞつゝ候 摘と罪と候兼ゐる詞也。罪をしかす心也。深

氏をバ紅葉とへゆるすがしまでもるきをと。凌梅三往心也

一 くるすの 紅 今東山殿ハ愛宕郡之内。小野ハ上賀茂領也。栗栖ノ下社也。寛仁二年十一月廿五日陣定ありて官符を下

されおつめ。此柳はくるすのさとらんと云ハ此事也。宇治郡ニ在。小野栗栖野とぞ。それを云におよばず

一 くれなゐ 紅 くれなゐのはたとハ紅に染襟を服の時ハ黄ぐちを染て一春の為

追悲の服をさゝるや

くらうさもしもむしあり

一 くちら 九官 家中 家中を

一 くらくらる 臨者ハ倚廬と

て服后を切さげて、おりしまする。倚廬の為ハ日月の光ももる

らざるや。礼記問喪篇ニ寝苫枕塊哀親之在土也

一 くづれそめてハ よるれ女の心さけ初めれバ名をもけがすとも

一くろれそめてハ　よろしぬ女の心とけ初ぬれハ君ともけるなとや

直田川にうきさいたん為也　一雲霧を　雲候王宅ヲ　祝人なるの

心也。雲霧の中にましいる祝人やはとなる

一くちつくしぐて　勅宣とや。猛ごちても同心也

一くまも　ひたちの山の兵のうちされたるすをいくち

一くもんしゆに　奉救やくもんずとあるなもあ

一くとくのむかひに　經信ずる人のすや。面目恚竭嚴為人所喜見

法華經信表切德不也

一くそくち　犀迸　古今集の作

者にも。くそといふ名あ

一くちまなどの　死庚　稿まま　拈

ある心也。拈ゆるまれくとく無心にしてと云心

一くらぬなど　官位ハ殺心の妨とせらや

一雲のさるなに　横川ハ雲のうち山なれば。しあたらはさもなくさかる。

山風吹(フク)ともまたとひのへとなるも

源氏目案巻第五

や

一やんごとなき　無止すとれ儀やと上﨟(ラウキ)人をもやさ心ハ位(クラヰ)

なき人のすハさしとれぬ物なれバやむことなきとはいへり

一楊貴妃(ヤウきひ)　長恨哥さ引

一やくためしてやくハ断(ヤウヤク)せ

一やまとさう　和國(ヤマト)のわや日本ノ

腴(ヤ)踉(タメ)酔(ラヒ)えて

わ人(サウ)のすや前ハじやまとわ人ようをのひしさ節目(スジメ)をさくし

とれ心や　荷氣(ノナカ)仲(ナカ)丞(ナカ)光孝(クハウカウ)天皇をわ(サウ)しなりしハやまとわや下

の詞よ　わ人ハまことにりしこゝろもそりさハ　宮(カウライ)驀(コマウト)人のすや

一山(哥)かつの山かつハ猿(ヒヅ)と云や　かゞかの早(ヒゲ)下や　猿子ハ子よりけるや

一やなしゝ　しつかなや。やもしゝかなる心也

一やと　やといふ声也　　一やく　先もやといふ声也

一やこなん　やむ。止(ヤム)也　又病(ヤム)也。所によるべし

一やうかなる　病かなると同し　一やうめいのすけなる人　揚名所(ヤウメイノフケ)

三ケのなすし一つ也。新撰古今雑中(ザウノ)。源氏物語揚名所(ヤウメイノフケ)のすを

忠与朝臣(タヽモリノ)に尋ね給とて　送りける　前原ノ雅朝(ニサトモ)朝臣

つゝへとて給ふもまゝふ夕がほの宿れあるしれしるべともなれ

久し　忠与朝臣

ころあてまそれかとぞりつゝへさそぬしさぶまゝぬ夕がほのやど

昔よりも秘(ひじ)すとしてしるを　一山がつも茶のかげにハ　古今の序の

詞也　　一山(哥)のもの　山のも後源にあるべし

月を秋月にそしらるや　一山びこ　あまびこ同俗にこむ
といふこれや　一山へ　山とぞらいへば　殿山のことや
寺といへば三井寺と知也　一やらう　屋廊やとらうとや
一やよひ　三月　いつきの月もやりけてよむや　五月をむつき
二月はきさらき　四月うつき　六月さつきいつれも山乱也
一山ぶき　袁山吹のきぬは面て黄に袁知也　花山吹は面て薄
朽葉　裏黄也　一山の名もおどろう　琴のしら
へとさして　鶴雲ねよりくだら　池の奥もうふといふもある
一山ちまはりわたり　くらまへ　尾志のいらせ　給を乾とや
一やどりこえさせしず　是はともえ申さぬや
一やしまもり　くまつこ神とは　地祇と書也　山祇と書ては　山づも

鉢と鐘也。かゝは鉢名也

一やうの物とおなじやうれもれ
とや。鉢宮鉢院いづれもおなじやうに心づくしなるすをいくら。
花去年の九月は鉢宮のれくぐらに心をつくしのひ今は又鉢院乃
れすによりて鉢とかくちのつすや云々

一山つと　集日本記　土産　曩万俗にこやげと云すや

一三月廿日あまりの程　鉢宮左府左遷太宰府云々安和二
三月廿六日也

一三月のつのくちにきくらゝの日
三月朔日にあたる上巳云々　世風記云三月上巳桃花水下之時飯
食為脯續漢書礼儀志云三月上巳日宮人置禊飲於東流水
上上巳祓禊のすゝ詩学大成にあり。三月桃花水下時に秋
蘭葉招魂續魄祓除不祥

一山ぶしのひがうたる山伏呼伏といふ世俗のうれて山林に入す
心也。想る出家を云とうたり　一やぶぎらし　敦原
一山人のあるさこのこ　文選潘安仁笙賦曰棗下纂纂朱實
離々。事文類聚李少君以却老方見上少君曰臣嘗游海上
見安期生食臣棗大如瓜　今棗あるさこのこは棗の熟す
一山ぐらはさるうりけれ　山口は山入のちじめを云也。伊勢造交のあら
んとて十月に山口祭あるけれも祉入のちじめ俗いへり
一やまとことは柴には秋の表を　万葉第一云。天皇詔門大臣苅原
朝臣競憐春山万葉之艶秋山千葉之彩時額田王以歌判
之哥　秋山の木葉とそれは紅葉とはとりてそ志のふ略也
一やりぶぐそとづや　一やくとは文を取役ようさ給也

一やまとむしぬ　秋田のめあしにあり心也

一やりたの家とりはまつるまたぞ紀　松淵　菊崎は同松河委　菊崎

は八幡同神　菊崎は藤前神功皇后なるも

一やちまたをとり物　柳は面白く裏あをし　夜は印笠と云也

一やさしきかたにはあらねと花かたれなりすくなきをやさし

きと云也

一やしまし　心やましき心也

一やまとことく　和琴の名勿論也　されば変りては只和國のことく

と云へるにや　又そへていへる也　和琴は絃六すぢあるも

一やなぐねなどをひて　大将鎖云以下弓筈を負るも

一やさしかるべし　さらしきやらじやさし紀をも云　取にはかるべし

一やなきれ下かきね　時問　志りすに志すとこも　下襲のいろは時

節にもとらぬことにや。二答下襲の文。時節によりたり。梅梅
は十一月より差用すれば。其冬は柳と号す。夜は印玄と云。同梅也

一柳の葉をもしらびあてゆべき　史記曰。楚有養由基者。善射
者也。去柳葉百歩而射之。百發而百中之。左右觀者數千人
皆曰善射

一山あゐにすれる竹のかしも
袈裟除時祭舞人竹文。其摺袍薄菊深下襲。地摺袴。石
袴。陪從櫻櫚文。其摺袍柳色下襲。白綾袴。合大口。赤紙半臂
緒別帯等。各同付之。畔詞のつゞき。東梅の裝束にや

一柳をさづけてつくりたらん　河　楊柳を白き文にあらん略双
第花をおなきいろによそへたるも

一陽成院の御堂　陽成院の御弟に。或ハ宮貞保親王と申

うくそれを桃蘭の式アマにまるずしへたる統一寵也

一 山里の衣をそふる　此詞巻の名大将の名にいへり

一 山がつれまゝ紀を心宛ちるゝ夕寄れ是まじき心あるをいへり さ
やうのへはさゞめごとや常の心宛ちるゝと云はうちるべし

一 やしまを給　進やをひやる心や

一 山ごゝの心ら　山ゆゑは山のおをへだてゝぬる物や

一 やしまをば　やしますれば也

一 山れにうすゝ　筆を慧の吹ぬふ
と推量しぬふや

一 山ざとれ　こゝろくは庵鳥や
ひまくのうちの音ちどをあつまくらゝ　をよゝをもとせくるゝ

一 山姫の　気ふく深くうくぞ　せふ方ならんとも　大慧の心はいづれ
ともわかぬども　慧の中恵にあひそめぬひしなにそれにうけろ

そんとれ心まや

一やづしわかれは 夜なども日の

ひかりにへだてなくてる心也

一やどるもまと 昔やどりこそ

不とおもはずは一夜もあしがるかんとれ心也 我生のうさくるす

を 宵生(ヤトリキニ)なとへたるすを

一やかれたるも 家巽(ノタツミ)也

一やどるも末 前の巻の哥をさひ出するも

一やかりかいは 戒(カイ)を破(ヤブル)すもおほかれどもと 者の詞なるも

一やまもれはたる 浮舟(ウキフネ)は秋の比宇治(ヨウヂ)へ流りて明る年(アクトシ)の三月に

小野(ヲノ)にうつりなへは 黄(ホタル)はこゝ給まじきと云説(セツ)あり 浮舟は蒸(カホル)の流(ワタ)

し給ひぬ心(イセン)に宇治へさいく流りあふすを不審(フシン)あるも

ま

一まぐしゆかさ 菩薩(ヨウ)に通(ツウ)ずる詞也 正神(シヤウタイ)にむかはぬ心也

一まうけの志 儲志(チヨクシ) 素文(ヒククウ)也

一まうのぞしをおふ 參進(サンシン) 日本記 奈昇(サンサウ) とも出也

一まさあるさしす さがるさと同心也

一まぞあん まうづ・まうで・まろ・皆和(ミラ)へまろしいづる心也

一まどりう まどふ也

一又いしをおてハ 門夏衣(ミカトカウイ)の房(ツボネ)へ・ぐびくしたしせ給すといへり・さしまゆるさ智給ちずとは

れいとまれるや

一まげたろす 曲(ニゲ)たろあるべし

一まらしとして まらしことぞ也 明菅(アケクレ)れ口ずさみおふ心也

一まめたち 実(ニヌ)ぐちや

一まぐ中将などに 源氏此時も

中将也 此抽紙にハ通(スキ)しるを出つたへたる心にてかくいへり

一まれにハあるがちひさんなべ 夜童又毛蝶(カツセミ)などに心をけ給すせたり

一まほ　まをとよむ。真帆（マホ）よきるすゝ云詞也。かゝほ真帆（マホ）と
いふ詞よりいでたるや
一まんな　真名（マナ）也
一まこれ　まやくの心也
一まうと　真人（マウト）おぼして云詞也
一まらうと　客人（キャクジン）也
一まろ　我をまゝ丸（マロ）と云るゝ多（オホ）し
一まくらかた　枕上（マクラガミ）也
一まくらきて　燈（トモシビ）のかすかりひ
らめくを人の目（マ）にしたるを似たるを
一まつりまへ　陰陽師（オンヤウシ）のすゝりまぎや
一まさにあるき事　八月九月　正長夜（ニヨニナカヰヨ）　白氏文集
一まじあるひ（ひるむしさ）かぢ　厭術（エンシユツカチ）かぢ　ちかぢ力（チカラ）也
一まゆのわたり打ちかけ　白ひやうなる御也
一まことまや茶の　うすむらとは深のかのうしのまひしるや

こちうきとは、その詞志実なるしば、それにしき紙こんこれ心也

一まひ人まいふどしよむや　一まぐてんぐくふ　此賠あるを

て人ぐくふや　一松の雪のこあくり　貞松歎

厳寒といへり、霜雪にも凋ざる、松の性のあくしかるゆへや

一まんぢのけいし　政所は想じて、万事の此用をつきこるや、ま

ところともあり、歳月は入立て、こ後かなりしすども紙つきどうや

一まぐしゆきたるにはあらぐ　紫上は母なるきね、祝母やしなひて

あれば三月の服を一廉心ざして、除服の後も志びしくいうすを

の衣をきあふや、まぐしゆきたるとは、紅梅もえき、朽葉梅梅などを

あるきねを云べし　一まかげし　まぐしたうく、それにあら

などくろこなら入るや　一まつりの祖　祭といひては、葉茂

のまくらのうすや

一 まゝかゝ いさかひするを云也

一 まくらそばだてて

遺愛寺鐘欹枕聴 白楽天

一 まくらと夜すがらぬべくおぼしなる人ぐの物いひとりあかす

うき身てぞ数ハまして涙の雨よ落ともおもてもあかつくむとや

一 めし まくらあまさつくらもて

定家ハ流まくらを欹云に瞬めぐらす

也摩迦那波 日本記

一 あさみ まるられのひとさいがく 菜上

の髪の涸ぬうすはれたるを云也

一 とふの ましか 鉢 日本記

一 むかし まそや まそとずしや たま鳴の狩也

一 まくさ 瞬也

一 もとれ まんそうぐれてうちもさみ

西家枝云 踏奇日 鄰人起座唱万葉和 紙皇延祚億仙

除 万葉和元永慶寿年光藻 催馬楽淡海三船撰之 今案万葉和ハ

多くハ竹くく

すべて八句の詩や。それを漢音にうたひて句どれあらひに万葉
和紙となるゝや。階奇れ舞人のたちき風にいふすなりを。深
氏の君の口ずさひにのみつや。しばらく二句をかきつけ給ひ給
一 又もかいのて　一通ハ雲ね原。一通ハ如箇方丸
一 まんなれすこゝろほどに若まんなれすこゝろとはしとすく
して。草に書しる紙云。それハ猶もこゝ不可。なる紙をやうに書
すぐさばしどけなき文字すぐさにちるべき心や
一 まぐりぬさうし　寒拍とも草子と云や。円外典の書にも。春
第一。第二ちどと云外記あるも。寒拍かしんかにてあるや
一 まとねまべし　内程や的射弓ねるや
一 まつりの心うけまふ　神を網受しきれかとれ紫のよれ心や

一 まさいくと榊葉をとり 神(カクラニ)の葉有千歳早(ザイソウカ)哥(ニ)と詞也

一 まもるとつよく 源氏に此(ミ)見(ヤス)所(トコロ)のよしんとしぬへば 伝神(フツジン)の守護(シユゴ)

し給ぬへ。えらるを給ひて。此葉上に寄給(ヨリ)とも

一 まうびうさるれ 仁和(ニシワジ)の御(ホンソン)哥(ダイニ)は大日也 摩訶(マカヒ)毗盧(ルシヤナ)遮那(ニ)と

は大日を申也

一 まつしつへくまつし 行(キヤウ)人の

眠(ニヨコ)さしれおそろしきき雨をいへり。何まつしは目也。つへくまつし

そまつしくしきちどやうの心ゑ〻

一 松(タヽリ)の陰を山 類(ミヤ)の小にある名所也

一 松(哥)の陰のあまれ 衣のるるしは。忘用れて力に雨とりるるをいへり。

されはとて今更ぬさうふべき名をば。いかでかくてぬふべきとも也

一 まと(幻)紙う河声 映(カウ)く残灯(タルコシ)宵(トヒ)壁(ビ)影(ヤ)蕭(ヤ)く暗雨(ヤ)打窓声(ヤ)白氏文集

一松の葉をすきし 仙人王莽食松葉不飢寿百七十余年
すきハのこの木心也
あさき心也
一まつくすきまるに 全ゆぐん
一まつでこそ ふされとこ也
まげこそ 心りしちくとくゝすまや
一まつさかたし 笛枝ま。山さらされを逍遥して抄づちを枝まう
らいつら。叔姪和君来ち布利 一まつくめちぬ ちらぬハめれ也
叔姪まそへらと論こえゝらん。松まそへら
一まろこそそゝくる 懐仙家を出て 昔のくり。昔ゝ中家の木津
あれしバ。李家氏おちこ也
一まろゝる 園項 法衍也
一まめ人 古人也
一まめくしさ 古ゝ歌也
一まがく歌 狂言万
一まつちさんこち 大臣也

一まさぐり　なさぐりづれをとてあそぶ心也

け

一げらうの女衣　一桂衣の三四位のむすめなどちかくべし文衣
と三位よりけうちてうけつまとりてハ桐壺の女衣ハ中れ也

一けふちしむべきいのりとも　女衣の冠そてのすそいふ

一けちて　地いひそうや。火ちどもそでもえやさ心也

一げうあまけ　具あるべし

一けしきざくこ　ざれことも云。これ詞よつきて心にさしあつや

一けんひ　気装託　形勢

一げぢめ　河　結目　掲目

一けうハあしぬ　げすしくハあしぬや　河　不下情不怯

一けちかき　気近

一げらう　下官也

一けうそく　脇息(ケウソク)や

一けさう(タクスイ)　懸想(ケサウ)や（オモヒヲカクル）

一けうとき　気疎(ケウトキ)　気味(ケウキ)

一けとしれぬ　気(ケ)字ごころや

一けぢかきあたりのこゑ　くさしぬるとや　ぶいこゝろもひよしび　さうしゑや

源氏の雨夜(ヨシヨシ)さげじひけむとがびひろうまめきろ心や

一げんきのおこるひとし　験方(ゲンカタ)や　物(ツヅラヒ)あるくまもだんのありと云日

一けむりまくわり　稚(コズヱ)どものまえいづりたさかくるやうや

一けづりぐしちぐま(みちのく)　かくるどもしぬかと云や

一けざやか　清方(ケザヤカ)

一けちさす　碁(ゴ)のことや

一けいめい　おどろきさわぐる心や

一けおそろしう　気おそろしき也

一けしひをいさけよけらめり

一源氏のお陽やげぐと　此源氏

親ハ遅給源氏姓とよりや。相光源氏ニ

一けうく　花見の御意也　一けんなど　勝

けうをさうすべき　花をさうすべきなどいふがごとし。一催興

うゝ心也　一けふハ六日の御もれいゝ　長神

物忌也　長神方違ハ。又日六日續するや。又一説。何にてもたゞ物忌

がゞきたるを心得べし。天子の御物忌のあきたる日也

一けちえんなるほかげ　揚焉　あしかるゝ火氣とや

一けうさうし　源氏ならひしやうとんとの心也

一けうある郎のもしえらて　翰林の人出郎するや。韵の字を

切韵とて。何字をもつて韵とするさ云時もあり。又郎の中にも韵

とゝて。郎の文字の中。平声の字を取て。韵とするもあり

又何韵なりても。作者の心まかせにする時もあるを

一源氏のうちつゝき后に　夜壷の中ぶ女の後。歌ー文乃女の中ぶ女。

源氏の姓を給ひしざれども。帝主親主の御女をば。皆源氏にするや。

心は夜氏の中絶するも

一けさうしそふ　化粧力をよ

くつくろふや

一けしう　花　けさやうなるを

潔歌ん

一けさう　乳池くれがましくぶ

ちぶるくおくはるる心也。けんさうさまを

一けぞん　家損家のきさとな

といふ心也

一けうぞん　孝ぜんや

一けりんれうを　花文綾は有花文綾也。謝恵連詩云。客従遠

万素遣我鶴文綾と云同心也。或説顕文綾也。かんむしやなど

云かごとし。是は夜の出衣を云。当時は穀の竪文なるをもちゐるや。大略同

ましれば比の花とは略似菓(ツコ)に花を云。夜の無良。花圃(ハヂヅノ)に深(ノム)るなり

一けやかうもつうまつりれ　芦塩(アシガキ)の哥は男(オトコ)の女を友なひて家を

塩(カキ)を鉞(コヘ)ていぬりを。女のおやまづつ人のさけりをなとこゝあぞつげつらん

とうたぐるを。弁が将ましひの事也。それをけやかしとはいふ也。ごゝ

けりは家のと云詞を。年へはけりは家のとゞおとゞの助音(シヨイン)しなくる也。

花は物語古匂(フルク)を引入て時は恒てけるを多し。是も只引入

なるべし。けやけうむ字なしこゝまさなど云心也

一源氏(美下)のうちつゝき名は　東花物語源氏の打つゝき名(キヤ)にあらず

ゝ。其日の外のれどゞめなことゝしこゝる

一けんぎ(こゝ定)　媼(エンギ)疑うたが心也　一けうしのかさち(すもし)　脇士菩薩脇(ケウシノボ　サツハロキ)

は立給親者勢(ムラ)至(ヒイシ)のすも　一けよあしうきこしけり

夕雪の前の詞に世中をむげにおぼしたるぬにもあらじと
云を。アクとゞめぬて。我のこゝやうき世をたれうとよこゝ給ふるや
一源中納言　薫中納言のよし。行河の東にもこゝ。又椎本にも中納言
に咲ぬふとかけるも。薫廿歳の時咲べし。紅梅竹川椎本。同じ時を
をかさたるや。此以来にこそ。これに混乱すべからず。薫の遺教にし如
の巻の。三とをぐらかになすかぬと云事に。要領を。目素のみれ字ニ勘
一けんぞし給　碁の助言や　畢見物の心や。又現記や。けそうと云
ふる事もあるも。けんそうとある事もあるも。おなじ事にや
一けうし　孝養や
一けらひ　穢や
一けしやくこと　讙摩に芥子やくるもあるもけしのかも同じ
一けうのこと　弟子
一けさう　化生

一けうやく　抜易（ケウエキ）抱をくへうをとも云うらそめげに抱を作りを云

ふ

一ふこそじめ　皇子（ワウシ）七歳（サイ）にて、いづれも將（ハナセ）まゐて、此詮（キウ）者（ケウ）經序（ヒヤウ）

といふ文字をあそばしそむりや　此詮者經或ハ貞觀（ゲヤウ）政要（グハン）（ヤイ）（ミウ）

とよこそじめん給也　七歳（サイ）の例（レイ）多（オホ）し

一ふとうし給　舞（ブ）踏（トウハテ）手の舞（ミヒ）足（アレ）踏（ブミ）なるも

一ふちつぼ　兎香舎（ヒキウシヤ）也

一ふとしも　今氣もこそけりぬや

一二のみちうたふ　貪福（ヒン）（フク）の二道（ノ）也　富家（フ）女易嫁（カノムスメハヤスシカシカスルヿハヤクメカロヤリ）と畢輕（ノシツトヲ）其夫

貪家（ヒン）女雅嫁（カノムスメハヤタシカシカスルヿハヤクメカロヤリ）と晩者（シヤ）於姑（シウトメニ）文集

一ふもぶり　俗にいふと同

一ふびやう　風病（フヒヤウ）也　又腹病（フク）也

一ふいに　不意（フイ）也

一ふつゝかなり　いかけかハしらぬ

ふうへとゝ也

一ふるあねのうちき　朱衣青衣とまてそむるを二藍と云二
ことよむ。ふるあねとも。ふるへといふ同事也

一ふびんなる　びんなるさと同し。不便也

一ふくろう　梟説文云食父母不孝鳥也

一ふくいとくろうして　河衣　ふくしかまこしてかゝの夏かくろ
きや服ふ用

一ふせぐ　卧蒡也

一ふりそへ　わざとゝいふ心也

一二間のさい　ふるまハ持仏堂也。

ぶ寄女置すり所也

一ふげんほさつのれ事也　普賢
菩薩乗大白象鼻如紅蓮華色　観普賢経

一ふりきれかもぎぬ　てんといふ獣の皮にてつくりたるを也。昔ハ

まれに恙する物といへり。貂裘（テウキウ）かうきてんと云獣名也。如鼠（ヲヌミノ）といへり
拾遺（ジウイニ）云。かうきのかたぎぬを。富兒（タカミツ）が将入者横川（ヨカハ）にすこ給けるに。
中家如子（アンシ）にかたしけり哥。有別紙

一 ふでのさらとりそうせ。おほきゞ紀のる紀とや

一 ふこゝるどかうずり 花詩（シ）を披論（ヒカウ）する時も。庭中（テイ）に立たる文藝（ブンゲイ）とり
きて。此前にてて。文人（ブンシン）どもハ階下（キサハシノモト）にすこて。論頌（カウセウ）するや

一 花のえんしゆふ 花おほやけごとにあずらへて。太大臣の亭（テイ）に
て。花筵（ノソエン）宴ある。又天暦（リヤク）三年四月十二日。飛香舎（ヒキウシヤ）花ノ花ノ宴に。和歌（ワカ）
管絃（クハンゲン）あり

一 ふさけしうず 不詳（フシヤウ）さらるべ
うしさうさ海や

一 ふりき枕ふる紀ふす海 長恨
哥。唐本（タウホン）多分（タブン・ヒ）琵琶（スイ）衾（フスニ）寒（ヒヤカ）とあり 哥 白氏文集第十二 唐本 引（レキ）

勘処旧枕故衾誰与共云々也叶源氏心也　永正七七六記云

一ふちやうなりつる不定也　一文王の子武王のおとうとく

史記魯世家周公自稱何にいへり成王の何とかの給ひんとすらん

とかけるハ毎とへハ周公の王位のつゐての如くなるハ武王の後ハ成王の位

に付ぬへり　さらに此物語をなずらへていはく　東雅院の脱履あるハ

今上の位に付ぬべきことや　さらに東雅院の次に此弟の冷泉院也

此位に付ぬへハ相違するやうなるによりて成王の何とかの給ひんすら

んとは今上の所をとかりかくさと云へる心也　我文王ノ子武王ノ弟

成王ノ叔父也　於天下亦不賤矣

一文集　白楽天の詩賦とあつめたるや七十二巻あるも長慶集

とも云

一ふんのつき　云　勅召書司云々

祢唯作云御手奈良ニ万為礼書司則取楞女如琴置之而奈云

今東物合の後ニ逆流遊あり書司ハ女官の居也和琴をつきさ

ずまきり和琴をもやて文のつきさ云也くちめハ宇多の法しよ

つひさり和琴や

すごいくら今宵の琴を手て琴をひきかへさに誰もきて見く人あり

一 ふりさしまくしまれ 琴をもさ

一 ふけんさう 普賢講丸

ドとよさまへり

一 松虫のつげ きさしく藝しきや

一 ふくつげれと たえやことや呼かと人きり海也

一 ふえのきまもかうとハ 向子期思舊賦序曰隣人有吹笛者發

声寥亮追想曩昔遊讌之好 文選

一 ふかんも 大路 氣象図 ものさえもさ名あり

一 ふくしきなくたる　肉くのすぐるはいさたる物のさやかぬがうきさや

一 ふぢのかそなが　女の裳束（サウゾク）もしらこぬるや

一 ふれぐひ　觸（フレ）や縁（ニン）ましりぐきすとれ心や

一 ふくりくさ　むさぶる心や　一 ふくりくさいひまて　玉（オホミヤ）は大家

の孫（ニコ）や源のみまても葉（アウヒ）のこのまゝみや　いづれまてもなれぬとのゐへら

一 ふんせさにも家礼といふす　円大臣の我はおやうたるるに夕香

の家礼（ナレイ）のしるしまさぬと恨給（ウラミ）詞や家礼と云は子れ父をう

やまうるや　他人なれだ子に准（ジユン）して礼をいたすをぞ今の世に

も家礼と云やなるがしれをしへ儒（ジユ）の（タウ）なしへと云や

一 ふせるどおほやけさ後　親王大臣は下（ケ）布施（フセ）を円裏にかたしぎ

給や灌仏（クハンブツ）の布施（フセ）には昔は銭（セニ）を用ゐるを中（ナカゴロ）より絹（カニ）にぬるや

一 哥 ふる柴ゝ名ゝ事 あさ紀 夏わくハ淺黄六位袍(アサギ ハウ)にそへゝ事

一 若之 菊衣にもちまゝやつれ給 脆衣(ブクエ)をもしき給ひしとや

一 ふくちれそのに奥入(オクイリ)に引哥(ニキウタ)を不用(スモチヰ)云々哥ノ种(ライホンソク)凡俗ありて只獲(フク)分(ブレ)の程(タ子)あるとも心得てあるべしと云々

一 ふといふものゝかぎり 譜(フ)や河海に琴の譜(フ)のゝ程(ミユく)ゝ略(アリ)

一 ふんじこめて 抽氣(モノケ)を封(フウ)し籠(コム)ゝ 行樣(キトウジヤ)者の様や

一 柏木 ふりがたう 女三尼(アマ)に成あても旧(フリ)がたき事也

一 ふたつといへんにハ源氏のさずよりも女三宮(ニヨサンノミヤ)のさずが笑止(シヤウシ)とや

一 ふりめき心 古風(コフウ)なる心にはせふとや

一 哥 ふりきぬ(よこふえ)のあれ 花 翠のねにうつる程に更(サラ)に詞をばかりさぬとや

一 哥 ふえ竹にふきよる 柏木(カシハキ)夏中(ユマノウチ)のうた風(カサ)とは息(イキ)にてすり

一わきまへなば、ゆゝしきよろこびとハ物や音律ハ皆声の調子に付て吹

一つきみつや、きゝかへし　一二三日 [illegible]べし

一ふせんれう 浮線綾 唐綾や

一やさしきす 粉熟ハ穀をよく／＼よわらかにして粉にして餅にするし

てゆで、甘葛をかけて、まるめて、ほそき竹のつゝにて、其

中へつきこめて、おし出して、つき出して、爰双六の調度也

一ぼうしまろすや、うつほの物語によくある

一文をもてあそふ 先夜訊めて翌朝に詩とせまいらする

一ふりかくれ 中頬とハ句と芸との中をいふとそふ心得べし

し。身のつゞくにつゝも不付といふ心也

一ふりう 武勇不道とをなすこと

一うち川の [illegible] 浮海の心ハもさぐるぞ代

我(ワカ)むしの始(ムスメ)とやふとや　一ふとゝろがしたうがしと同也

一ふさいのくに　吏妻(サイ)や　一ふかう　不幸(フカウ)

こ

一ことあり時も　いかしくたきちかまあり時也

一こちらかなる　此方(コナタ)彼方(カナタ)や　一後涼飯　此飯の雨(ニシ)にあらう面

れば常(ゴシ)の此来(ゴシ)にちかきや　一こゝろさん　心菜(コロバヘ)

一こゝろさせ　心操(コロハセ)　一こゝろきもし　けるやうつり

きもれつかりと云心也　一なた納言　想て　なた太臣(コ)故河(ニ)

ぐとあるを　清(ミナ)過(スキ)まひし人のまや

一こと葉　言程(コトグサ)　一こまうど　高麗人(コーラト)のまや

一こうろくさん　花鰍(ショクイン)負令(ルウ)の玄蕃(ゲンハン)をば訓(クン)に法師まちうとの

つきとよめり。玄ハ僧蕃ハ客也。僧尼と云もあり。むかし百濟國
よりも来朝をしゆへに蕃客とおるじく。此寮に川かさとる也
又鳴肝ハ腹の前を曰肝。鳴のなくときこゑをいづる所也。故に
鳴肝ハ声を作ると云心也。異國人来朝の時ハ通るすといふ法か
さあらて。毎日の心ざしをつくしゆへ也。七条朱雀にあるしと也。或
谷の四づかと云所の色くと也

一こゝかるく　無雜　ほめくろ詞也

一こゝさうゐん　穀倉院　おさめ殿のしまや

一心あて　をしさうや

一こち　まつらごちなどいふハまつ
ひとごとや。ひとりごちも獨云也

一ことゝり　玄撰也

一こゝ中に　雜なるまの中也。又雜中などいふ心也　花こと
なる雜ある中にや

一こめさて　巨字也　大やう乃

称也

一心づきなく　心よつかぬ也

一ことさしひ　ことさしまわさとりくらぬ心也

一ごうたち　後逆（ゴダチ）　御白氏（コタチ）　女の恐名也

一こと人のいえんやうに　いろうれしきまらぬ人のいえんやうう

と中ねのの源氏の君をいひぬふことごとなり

一心さしひ　心づかひ也おさえて古法（コハウ）也

一こや　これやといふ心也

一こともなく　かぬたり詞也

一ことのねも　祇つれなき人とバえやハりとゞめぬへるかうおかし

まもられしそ庭（ニハ）の紅葉（モミチ）をもかこ多てこそやしなれといふ心なれ

ハねるまゝの義也

一うしおれがこ　詩（シ）のすゝ也詩は

も所のごとくこしおれ也

一ごくわちのざうやくこうわち

ハ夜の暑気也 草茶ハひろと云ぬや 暑気をさらぬや

一九日のえん 皇陽宴ハ天皇南殿ニ出れまして内弁弁等あるを文人博士をめして其をまとしめて各韻の字をさぐり

事詩を作て講ずるもあるを

一故傳のこと 中納言まて大事つをかけたる人也

一ことくあくるれバ ことぐくおくく明りや

一ごうたせぬふ 博物志云 竟造園碁

一こうさあやのひとへ 女房の裳朱の月の日よりハすこし 我つ

ひわるをさわそひとへきるといへり こうさあやハうちきなるべし

若 こうさむしされに深くるといへり

一これまれも そのおもわしこれおもや

一こゝしたる たき物にまづしたる心也。こゝしめたる扇也

一こゝのしれ 九木(クホン) 上木上生(シヤウ)のるや

一心(哥)あてに 花 夕がほハ女のけがれにたとへてよめり。家の光ハ源氏
によそへたるべし

一これこそがあづり 夕がほの宿(やど)
に惟光(コレミツ)がめしろ法付たる人をあづりといへるや

一こゝどのるも 小舎人童(コドネリワラハ) 中将 少将ともにつるや

一ごかぐ かたすの者(ヲト)也

一ごと 如(ゴトク)也 おもしごとおもし
ごとくや

一心ぞしたる ぞしハそへ字也。よし
ましたるなど同事也。こゝ其心のうとせそへたるバとの心也

一こちたし 河 おほき心也。雑(コトノ)かや。ことくしきや

一こしらへたしせく心也 慰(ナクサムルコロ)心也

一こゝにそぬ念仏　葬送以前無言念仏得十五功徳云々　河にあり

一この鳥のなきしを　鴿や　かくろうどきくべからず　おまうしの院

にても鴿のなきたりぬべし　一このほどまでいたくふるる紙

中陰四十九日までは中あまりてよひさるまうぞとや

一この家のあるじぞ　揚名介書ハまし此家のめのとう娘や　三人の内

嫡女也　又一人ハつくしに領す　一人ハのかり　右ハ別のタゞかのめのと

が娘や

一小栗なれど　柴垣のやさしく

ミゆるさ雨や

一近衛の中将をすてゝ　此明石ノ

入道　前太政家の時　近衛中将まで成られ　それを捨て　懐戸

のる籠を　ゆ給ひれるや　一ごさん　催才　加持祈禱や

一こさしぞらのちゝい　僧都禁足の塔　三年山ごもりとや

一くんかうしのすゝ　金剛子念珠ならびにかゝへ元興寺須賦

悵然九なるところ　一くんあられつゞ　鉗掴碣砕敲

馬と貴布祢の中に、俊正が谷といへる、薬師仏不動尊霊験の

地也、薬師仏の壺也、俊数の送物になるや

一ことば背ある人よて　抱よくいふ低云や

一心よくわるともへられば　女房人ゝ紫のよいとをかゝてハとや

一ろもしるとも　葵上六条れ息所の術や

一こと人のいふんやうに　命婦ハ源氏のめのとこちれバおやうこころ

おりとめそとの縁也　一心だくすずさう　心をさし

すまくろうごとや　一内裏　天子まうざわてごさんと

もせべしおるよおまへどうきとわらしごさんとしもべし

一こゝう巨(コ)ろや。おほやうこゝろされあろ心也
一心ゆるぬあくさまぬるを云。心ゆくハあくさむ心也
一こしのうちも中宮の行啓(ギヤウケイ)にハ。鳳輦(ホウレン)にめさるゝ事なれと。又庇(ヒサシ)
のいとげの車に乗(ノリ)給ふ時もあるや。供奉(グブ)人の行粧(ギヤウサウ)も。繁昌なり
よりてくりつゞける也や。伊勢物語二条の后の民部におはせを引て
一後えんのす(ゑのしん) 弓の結(ケツ)を大臣にておわ。後宴(ゴエン)といふ名目也
男踏哥(ヲトコドウカ)は後二三月に弓の結(ケツ)あるをといへり。それを後宴にある
あそびなりや　　一こゝさうによすめるほとを　こう紀
むらさきの雲をうるて。月をいづくしさうにや
一ばれあへまえそいげのをかくさせ給ふめ　二条の后をも忠仁公(チウジンコウ)に
あずかへて。かげにまそうくさせ給ひもあさ。源のおへるゝ也。伊勢物語

さく為れ下にかくるゝと云へる所に似たるも

一ことつけて　かこつけてや　一れ禊の日　れもしへの日也今菜架

茂の秋院ト定まりて後東河にのぞこまりて　れそきれるまあるて

すくに初秋院へ入ぬ　初秋院とは大内の中大膳識或左近府などを

點じて　それにて三年紫秋のまゝ其年の四月にれ社へ来給

りんとて祭のおに吉日を擇て　又れ禊のまゝ則紫宮の賢女に

入ぬ　これを二度の禊といふ　さて中の酉の日賀茂社へ来まして　来す

に御給也　毎年の御禊は必手日これを終するや　下略

一こさあをよびのかこ　花田にあ代のましれるなや

一ことさしにつくり出たんやうなるも　花　三秋朱晩之候五夜将

明之天別緒依々之情虫声切々之恨遭逢斯時ことさしにつ

くりいてたんやうや

壇御修法（ダンミシホ）　降三世（カウ）　金剛夜叉　庫（クタ）　薬利（リ）　中央不動

一　めぐんの三ずかう　大威徳（イトク）　謹摩（ゴマ）五

一　めくそんの日　法華経や

一　こまとり　拍取丸細丸細分（こまとりかこまとりサイブン）

ちどいへるたぐひや　対座（タイザ）はぬきとりて　蔵（ツガフ）や

一　こしのべて　茶　蟄居（チツキヨ）をうへの日々へ出あるく候　こしを乃

しといふや

一　ことなしまて　無為（ブヰ）　日本記　こと

ちしひも同心や

一　こうず候　こうぬるを云や

一　心（丹）かしらどこ世　茶　どこよハ仙境（センキヤウ）をいへり　去秋（ハルアキ）のかりもな紀ことなり

て当世（トコヨ）とハいへり　房（カリ）ハ小国の世をなれたる所に侍（スムトリ）なれバ　かくよりこ

ちしりをなり

一　心（丹）あつまてひくてれ　奴婢（こせち）の心か

琴にひきとゞめられバ　じすま候　なるこまじきが　さハあつまりじきと

一胡のくまに花くしかりなん女
の哥の心也
昔王昭君ハ胡国の王ニ嫁をしるすハ行まもなきまゝあれバあるく
らしくまつみすいせうそすこてまハ我心人なとをやうれ遠国へやるも
うしバいくさうとれすをらいんとうれしくのあまりまづまもあらさ
るすあれと家まてふうどくのあるまうけて昔にすをらいあます
一このあまくよひまかる枕えやうし
らへの心也
道満法師若ハ播磨国ニ云ニ住すれ
一あしこうじ
細字也くるびれある心也
一こまれくるゝ女のくゝ高麗紙也
一この海なとし木玉も樹神也されバこちをおくりしと書て
一こどよろ旬をまくいひあます也

一こまの侍従が母やとさるゝさき物の名ハ代ハりしと名付しや

一心葉　天暦三年夜花ノ宴ニ于膳於心葉夜花ニ云ヿ近代ハ菓子物
於教の四角ニつゝむ也。今ハ松の枝ニ糸ニて葉をむすび鶴
などを作てつるす也。是心葉の事也。今も檜のわりごのも。今は
て菓子を作てそへるをと云べし　結遣の方にも心葉と云事

一この世のちぎりハ竹の中にすぐしやひめ竹の中にあひ出されハいや
しうしんともや

一こ世のあつき呼私勤除目成文
掛讃岐守目録八位下臣朝臣相見　畫師。昌泰二年三月除目執筆
寛平
時平公

一れ前まてくらまけさくじめん
ことしの歌合てとや。天徳哥合を様とす　古来歌合勝負之事
例や。亭子院親王歌合のす。後括遣ニ亭子院親王歌合しけるよ。

うゑの菓子(サワシ)にうきて付けり哥あるも略す

一この時あるとする人のいひつたへぬ世れしとくきに延喜(エンギ)天暦(テンリヤク)の聖代(セイタイ)と云ふしより冷泉院(レイゼイ)とは天暦の御宇(ヨウ)にちなずらへ給ひ也

一杭 これ去より内の大政のつくしを給ひ堂 花鳥(ニクハン)委(セイ)倭(ガ)露(ヒ)ちに比し てあり倭(ヒ)露(ガ)観(クハン)は融(トウル)公山庄(サウ)後にちに成り清涼寺の東の方深院堂や法橋(ホツキヤウ)上人(テウ)菅(ヨン)然(ウ)し清(ウ)釈迦(ヨウ)堂(ヨウ)建立(ユンリウ)と云ふ

一ことゝもしるしどうり 小高付(ユトリツクル)枝(エタニ)のしり数(カズ)九を羽(ハ)の下とはさゝそ山菅(スゲ)茅(モシ)は浮てきかつゝて付也 萩(オギ)にうきしず萩(ハギ)薄(スヽキ)菊(キク)の枝(エタ)にても付也しるしどうりとは 狗(ウ)はねんごろりもとでと云 熱(ルイ)成べし

一近傍づきの名ゝきとゝるも物のかし 花 今東物節(モノフシ)と云ハ近傍の舎人(ドヨリ)の中に東遊(アヅマアソビ)に達(タツ)したる物節(ノフシ)と補(ホ)ても中に番長府(ジチヤウフ)

掌ならぬもまずるや。是によりて春日祭。賀茂祭の使の羽林東遊
のを来十人めしぐするに拍節の近濤。求子駿河舞などゝ云ふ
をつとむるや。陪従には府生の中。才ある物を用ひ加陪従も云ふ
近濤の官人や。陪従は和琴笛などゝ吹拍を云也 略之

一 これやまうくしぬへ やぶまうくしぬへや

一 故大納言いまひとさぶらへ 大鏡云。三条院の此時に后にまゐん
とおぼしけり。内よりは大納言の女の后に立例なりけれど。此父
大納言を贈太政大臣になしてこそは后にしてさせ給しかと

一 子代とりといふ事 史記 明君知臣明父知子

一 女節にてまつり給 源のまいらせらるゝ女節に惟光がむす
め来るや。弄 同云源氏君は五四のかにや。一動可能むすめなど。

拵(ヌキ)ころ人にかけ作ころ云々分。又受(シユ)飢(ハヤツマ)分ハ國司(シ)ころ人や。是を用
裏の此節となづくや

一こまけぞ　こゝ夜なるまつらひ

一こゝあらめしをんのをり拵

や子細(シサイ)のうや

河しをんに面もそうらうしまし。おくろ葉(ハ)ハよれつ。此拵葉(クチハ)の赤
き方によわらるや。公ごとハ上(ウヘ)ニ着(キ)。おくあいこゝぬに必りきるるや

一心りら去まつそれ　心りら去に心をしめ給ひ。紅葉のたもしろき
をもゆらんぞよとや

一ことぞそごこころ　拵いひの
なまりを云や

一この月ハこされそてなり　三月ハ
去季(ノキ)の終(ヲハリ)や。四季終(キノ)月世俗(セゾクニシウゲン)説云をいひや

一胡地のせいしをばむなしくすてくつ　一本　胡の地　梁原(リヤウゲン)ニ井(ヒヤウセイ)ニ浮
見(ミルトフ)　白氏文集　胡地(コチノ)妻子(セイシ)虚弃(キヒク)捐(ステ)。従(スツ)漢(ヨリカン)攻胡(セヒコヲ)之時漢人止胡国(トヒリテ)ニ不浮

帰漢軍敗之故也。後又従漢攻胡之時。止胡之人欲攻漢也。此時奔
胡妻子而漢不入彼人剥圍之。号敵国佐人也。仍両国無役之意叶
物語喩云々

一 ごしとて　如師ハ今ゝ法師のつ
こまくる　若反万葉考て二度
一 これ戸ぐちいるべき人も心とに
一 こひわたる男ハ　畔　男とハ深れ自也。
いかなる藤とハ玉かづらのいかに弱きなかんさや　実女ハ心ざしそあ
なしんのやすしひや
一 こうもいのいといたくもんう紀之
紅梅のもんうきゑるハうもぐぎ　いまやうなハかきねのきぬなり
一 こゝぶきをん　壽詞　日本記　祝云也
一 こゝまち出たる　引哥来勘
一 こゝくもうりしきふくろして

管絃の器皆袋に納本箱也　一こひの山にはくしれたうれ
花今案孔子のくうれと云るハ昔より世れとくさに云つたへたり孔子
ほとの聖人なれども時としてたうりしるれはことくとも本文那ち
にをよもす　一これ君たち　是ハ君たちとよむべ
しいつれもさんたちとよむ也　一こまのくれかたち　枕草子にも柏
袋の名に出をる　一このミあつめ　好ミあつめ也
一ことついさひう　空　もつきなと云ぬ也ことつきなべし　ことつ
ひいとにるくらは本もあり花鳥　三説あけ見へ　きひう何とも心
ねず　うつくしきすれ　一こちくましかば　引哥未勘
一のまさ　こうちさひさおとし　かけたるを引おとし　恵也
一はおれつぞをんざいのえん　ほ嫡なかし　中ねの下がきねかとも

一こしゆひ　もをききて腰(コシ)を引ゆつるや

一こらうれ出け　古老(コラウ)のすけ也　典侍(ナイシ)也　二人をさしぬ人も内侍のことを呈(イ)人ゐこ也

一とりぐいかさねのうられほそなり　紅梅の唐織(カラノヲリ)物のほそなりや　女乃

さうそくはもうしきぬなどや

一ことくもれさうそく　ことれ(ヨウヅク)　[illegible]

とは絃(イ)かけ　拉(チウ)つけなどや

一心(哥)あらて風のうぐ　風ぶる心あ

海に堂にて吹ちらすべきしくや　是も落梅(ラクバイ)の曲(キヨク)の心也

一こまれかこれもぐこまやかなるぞう　紙もぐうつくしくなぐや

かなるや

一極(荻のうらは)示寺　深(フカ)草(クサ)在(ニ)て　昭(セウ)宣(セン)云(ニウノ)

此(ゴ)建(コン)立(リウ)也

一心やましきほど　待(マチ)かねるや

一近傍つかれ使　賀茂ノ祭春日ノ祭の使近傍司(ツカサ)を用ふるは東遊

とをしらるゝ故也

一これ(是)秋の行幸　呼去秋(ハルアキ)と云ふ

夜は長は屋し冬は秋は屋也此義あるは此は夜のうしの十月なり

一 小松ばらまれよもひ 末はさきよりひよひれて深も年をつゝ給ひ也

一 こまれ 籠物 献物 毎義也よそ枝は四十枝也

一 こまれらんしやう 二段は宮簾也 乱声落蹲舞れそれ舞す

也 左の舞は唐 右の舞は宮簾也

一 こひまする人のこゝ 女三の形をとてなるせば何とてねうしくさなくと也

一 これ玉はひきつゝるもじ先 義 先恭天皇 文武天皇也

弾琴給云々 呼うつ不れとしけるなるを云々

一 これ志らへ きんはは如のしらへ事をいへり 河一は掻手 二は

は序番 三は水宇鞋 四は蒼海波 如は鴈鳴詞是也

一 如六れもらば 今の世は無業内といへり 河 万秋楽 如六拈 [illegible]

破ハ久〃ゝ敷に。四六の破あると云や。四六の破ハ六指の破ハと云心也云、

一ごふし廿七のぞあるの給　案ニ是や是也。若ハ案に深度に七ども

よ是以よりさるに。此巻より八十年ととりとみてよし

一心ゆるひるし　油断もあるまじきし心也

一心ぬるきもしくゐる人ハ　孝経ニ云小敢学サ得福大敢乎大得禍

孝経全徳要道篇

一四久ハぞくり　殺生。偸盗邪婬妄

語。飲酒

一四十ものハ誦経　四十の所作

あれバめぐり。四十戒にハ四戒也。

一これより身の家に　喪中にても

きゝくるも。父の為によるべき服衣を着是為によろしきにより

のかへり霞の衣とハ。服衣也

一ごとあるもハなし此枝　ごふろくハ

めぐれる是なきしの枝とハ。おもひ枝にあまれん是。葉は是秋とハ。稍

ト無絃にしていふ

一これ〳〵これもこまかに侍らん。落葉
家の琴きゝ、指はのそのひいのこゝろこれ心や

一琴をとめとらし後　指をきれくそもそこ落葉家琴も引絃は
ぬこれ心や。昔伯牙鍾子期とて二人なるもの琴をひし人ありき。
鍾子期死て後は伯牙いふやう今より後弑琴を聞知者なしとて絃をきれ
ことひしとてやめしとや。それを伯牙絃を絶とはいふ

一声はうつとりて、挙案傍襟のこゝろ、夕霧と指果の知音と云

一これはこゝろをのべたるなり　落葉は想夫恋をわすれざるべくなると也
夕霧それをのゝしり給とや

一これはあん彼とこれの紀ことを
代々指果までもち傳る名物の笛とや

一こまゆハかゝるよの月の文。三五夜中新月色、二千里外故人心

一こうしやう 業障（ゴウシヤウ）

一こゝあらはして 雲ゐと夕霧とは此中とのあらはしての心後のるや

一じ名こそ あふ日と云るや

一これよれは得ひ 天人の心れどのゝ

かゝる香（ニホフ）や 二十二相（サウ）は此二の毛穴（ケノアナ）よりる出（ニホヒ）や 大相（ソウ）宗相（ソウ）初 香孫子

生るゝ時 一室（シツ）蒸しとや 聖法（シヤウトウ）太子も同

一心のなしかや さひなしれ心也 一このまへ也 竹川 おまへにて 合れ

一こゝらく 極楽の哥（ごくらく） 舞（ぶ）の菩薩（オサツ）のるれ

一これも月にもなるゝ 琵琶（ビハ）は 撥（バチ）おさむる所を隠月と云 面白詞也

木子嬌琵琶詩云 半月分絃上（ハンツケン）

一こひまびて しぬるくすり 我恋

まひてしるんとしふは雪の山は絵をけさうは死なんとしふはたゞひたる

と我心をあてのあや雪の山には菜のまゝなはしぬる菜れゆしきは

さりふとも

れなれば心ごゝろなきも

一心ごゝろなき　童子ハ求法　蓋ハ惡

哥さりふひ

一この虫ハ　くるゝハ鈴をそへたる

一これ茶一枝ゆるす　野鈴園中花類　鶴信君許折一枝春　朗詠

一これこそし　好殺ふれ子なるぞと云心れ　そしハ好なしてれ

一こゝろひつ　小唐櫃

一こゝれひとつ　引腰一袴もあ

さる事てを　袴の帯れ結なる地也　帯れあるハてんねんれ　志りも志

帯をれ付たる心紙合也

一こゝりとむる　毛延壽　王昭君

を盃浮ル者　昭君貧ようそをつゝめ金ようそくも絶もかる

なしたるなや　此事をいへり

一こゝに　蘿鄭なるべし一説本

よつきたる小虫なや

一ごそのぎに　こゝやまて　碁をうつり

け地の銭　紙をの送なるゆへれ

一こゝねづろ　あしたる金れ合地也

一このきんてんハちへ寄(キシ)者の紙(アト)に造(ツクリ)かへり申(ハンザウ)候べし

一ころのとく　此比の漆(とく)なきやうなるとや

一ころさんぶん　權記(コンキ)行成(カウゼイキヤウ)ヨ・長漆(チヤウトク)　五年十月九日於(テ)山階寺(ニハイケンスヱ)辨見牛(ニ)

弘梅檀木(ヅセンダン)ヲ

を作て緑青(ロクシヤウ)にて色(イロドル)也

一これ(うき舟)こいうねを　金(ね)にてひけて

一此家のぐ　一具(グ)とや

一心ぞしなし　むなきはきすうるす候べし

一心(うけふ)もとなき　何ともこしらぬ茶どもしなるし

一心(哥)こそうき世の　あまれうきつま　あれるすや

一此(夏のうきえし)しるべ　我眾陰(カサイシヤウ)にあるんとや

一ことくにハ　悪(コトヽク)にハや

江

一江さらぬ　えらさぬ心也　一江さうまじく　さへがさき心也

一ゑんどれば　恵うらむる心也　一江んに　艶也

一江せひこつまじれ　元鐐のつれなさゆかゆへ後まぞねん

此よはせふましさとの心也　一ゑこまげて　ゑこ曲でさしも

なさ女房などれるすをいへり

一江ひのか　かけがうといへり又焼物の惣名也　似かけがう一疵とぞ

河　衣被香　一江ひそめ　蒲菊ハ紫色也　紫の

くろさ色也　一ゑいなどしなへるハ　舞のまて

にある詠曲のうす如べし　其海波の変に詠のうす表

一ゑいまさなへる　縷冠のうす也　着服の人　巻冠縷

一ゑひのうすしその泪　白楽天が江州へ左遷して三月毎日に

夷陵と云所に泊て元微之に別し時作る詩の句也　醉悲瀟洒

春盃裏吟苦支頤曉燭前

一延喜の御手より引つゝへたるを　花あやまつまゝぶもれて作るこ

そしぞんれをうまうれれてまゝひて作れとは明石入道の事は延喜

の御門よりつゝかりて二代に成ぬるを女のあるがきくとりくるは明石と

の事れ上手あるをを入道のうち出たるも　ぜんまうとは延喜御門也

一いびかうして　蒲萄鬘也　いさる御のことゝかうをあけ申へ

されば　えひといふかうにあれかといふ事を　又後成女説かづらといえん

為まそへたるや

一忍うう　廻向

一東坂のもけ　近濤目中み将　云々官人ホ也　お神前求子なま

ふとも

一　五ほうしぐらり　礼義也

一 江よこそ 縁也（エン）　一 江なるゝ 艶也（エン）　ほむる詞也

一 ゑうちは 笑（エミ）がち也

て

一 てくる後のきんじ（きりつか）　輦（テグルマ）れなす 御出（オホセ）さるゝ也。河輦車（テクルマ）を石（イシ）階（ハシ）のなき門よりのかり。中室（ナカノヱ）を出入のことゝ也。中室（ナカノヱ）の輦車（ウシクルマ）とも云。牛車（ウシクルマ）ハ牛れよる所までのるゝ也。若今案温明殿（ウンメイテン）後涼（コウリヤウ）殿ハこれ中のへの門内の殿也。温明殿ハ内侍（ナイシ）所（トコロ）おはします殿也。東の宣陽門（センヤウモン）の中に有（アリ）。後涼殿ハ西の陰明門（ヲンメイ）の内にありあり。此寒の詞よこうらうてんにもとよりさふらひなふ衣更のざうし

とかようつさせなて。上つが口に給はすとこしたる。延喜式にはし

人。及（ヲヨヒ）親王ハ後涼殿の後（ウシロ）をかさるといへり。拙者の心にあひかなく

宣文芸濟の陣と云ハ中比室比門の外也閣門と云ハ中比室志門と云也云ゝ親範記云ちうれ車ゆうハちりうくてどられおりうさ車也ちうれ比輪ゝをとゞめて六府の官人のやくうそさて出入する也云ゝ

一てうと　調度

一亭子院　寛平法皇の御す也延長の父比門宇多の帝とまうや比絵をうせ給うてなうし哥比をうぬべし　紅葉をれちうなどもうすいろ地ハまれ増て本袖乃調子ちうくうむぐ一番亭子院の比をうすてうらあへろ也伊勢集ニのせうるも

一てうし　調子の義也

一てまつうそ　哥つれむうら紀　をまつうそハ銚子してや春壺を紫の根ニしてぞれまうく御まくるを云也いりしいハいりかや

一約拍　正月朔日の小約拝を云約拝のうすまはあらず時

清涼殿の前の庭に、諸臣拝也

一天地ことゝもなへてん地ときつとよむべし

一天にむまるゝ人の生天先墮三途天に生るゝ者おしなし

して三途におつるゝなれ、ちに又ち縁にひかれて、つゐり一時

に天に生るゝなれ、呼天人の母と人をいへり

一天のまなこ天眼也　一天べんなどしきかに天がしき

きかにさとらしむるとも　一蝶鳥にしハ八人　笠のうげに

舞出るとも、笠瓶もちたる童の刈舞人なるも

一てふいまして童の舞たるすがた奴べし

一てうたぬ心ち呼よさくみを双六にうたぬ心也

一殿上人はれいの内長宗のたるすなし　殿上人は禁中に

目中八十終

うぎらぎ院の殿上人（てんしやうひと）東宮（とうぐう）の殿上人などして、ぞ所ぐにゆれ
されて、昇殿（セウデン）するものをどのづらせ中にうのうるすもあ
へし院にて昇殿しうるとも、内裏（ぶいり）にていまた昇殿をず
も、殿上の役（ヤク）にさしうつるすうるもぬるすも云ゝ

一てううく（名下）　調柔（テウガク）也　一てうきつかく結　手掻（テノカキ）人にさう
れじと云（こと）に不出（ずいさ）して、くるまていさむるを云也

一天人のあまくくれる（まちらひ）　うくや姫（ヒメ）を行（タケ）を箱（トリムラヰ）うそうりしに家乃
中ひうりき八月十五夜に天まのかわしも

一てんく（身のうき猶）　天狗と云ハ星の名（ナ）牛頭（ホンテウ）に用る所ハ天魔の類（タグヒ）にいへり

一天人の[illegible]

一[illegible]

一[illegible]

一[illegible]

一[illegible]

69038
6AP78